

Contents

- Reconsidering Japanese Religious Culture with a Focus on Buddha Statues
KATO, Hitoshi...1
- Japanese Accent and Its Regularity
GIRIKO, Mikio...6
- A Comparative Study on Patterns of Topic Shifts in First-encounter Conversations in Thai and Japanese Speakers
Yuphawan Sopitvutiwong...21
- "Self" and "Other" in Atsushi Nakajima's Literary Work: Liling by Comparison with the Chinese Original Texts
Peng Yuxin...43
- The Nominalization of Renyōkei Verbs : Focus on the use of Renyōkei nouns as Isōgo
Duong Thi Hoa...62
- Overlaps in Japanese Conversations in Contact Situations: Focusing on "Overlaps for Turn-taking"
Xu Lijie...71
- Derivative Usages of "Tekuru" in Japanese and "Maa" in Thai
KUBOTA, Ikumi ...88
- [BOOK REVIEW] Tateoka Yōko (Ed.) "Nihongo Kyōiku no Tame no Shitsuteki Kenkyū Nyūmon : Gakushū / Kyōshi / Kyōshitsu o Ikani Egaku ka"
FURUYA, Noriaki ...105

April 2016

Chulalongkorn University – Osaka University

目次

- 仏像から日本の宗教文化を考える
加藤 均...1
- 日本語のアクセントとその規則性
儀利古 幹雄...6
- 初対面の会話における話題転換のパターン—日タイ対照研究—
ユッパワン・ソーピットヴッティウオン...21
- 中島敦『李陵』における「自己」と「他者」の問題
—典拠との比較をとおして—
彭 雨新...43
- 連用形名詞の使用をめぐって
—位相語としての連用形名詞を中心に—
ズオン ティ ホア...62
- 接触場面における日本語のオーバーラップ発話
—「ターン取りのため」のオーバーラップを中心に—
徐 麗潔...71
- 日本語のテクルとタイ語の maa の派生用法
久保田 育美...88
- 【書評論文】館岡洋子編『日本語教育のための質的研究 入門
—学習・教師・教室をいかに描くか—』
古屋 憲章...105

2016年4月

チュラーロンコーン大学・大阪大学



この報告書はタイ国トヨタ自動車株式会社の出版助成によるものです。

目次

仏像から日本の宗教文化を考える

加藤 均…1

日本語のアクセントとその規則性

儀利古 幹雄…6

初対面の会話における話題転換のパターン—日タイ対照研究—

ユッパワン・ソーピットヴッティウォン…21

中島敦『李陵』における「自己」と「他者」の問題

—典拠との比較をとおして—

彭 雨新…43

連用形名詞の使用をめぐる

—位相語としての連用形名詞を中心に—

ズオン ティ ホア…62

接触場面における日本語のオーバーラップ発話

—「ターン取りのため」のオーバーラップを中心に—

徐 麗潔…71

日本語のテクルとタイ語の maa の派生用法

久保田 育美…88

【書評論文】

館岡洋子編『日本語教育のための質的研究 入門—学習・教師・
教室をいかに描くか—』

古屋 憲章…105

Contents

- Reconsidering Japanese Religious Culture with a Focus on Buddha Statues
KATO, Hitoshi...1
- Japanese Accent and Its Regularity
GIRIKO, Mikio...6
- A Comparative Study on Patterns of Topic Shifts in First-encounter Conversations in Thai and Japanese Speakers
Yuphawan Sopitvutiwong...21
- “Self” and “Other” in Atsushi Nakajima’s Literary Work :
Liling by Comparison with the Chinese Original Texts
Peng Yuxin...43
- The Nominalization of Renyōkei Verbs :
Focus on the Use of Renyōkei Nouns as Isōgo
Duong Thi Hoa...62
- Overlaps in Japanese Conversations in Contact Situations :
Focusing on “Overlaps for Turn-taking”
Xu Lijie...71
- Derivative Usages of “*Tekuru*” in Japanese and “*Maa*” in Thai
KUBOTA, Ikumi ...88
- [BOOK REVIEW]
Tateoka Yōko (Ed.) “*Nihongo Kyōiku no Tame no Shitsuteki Kenkyū Nyūmon : Gakushū / Kyōshi / Kyōshitsu o Ikani Egaku ka*”
FURUYA, Noriaki...105

仏像から日本の宗教文化を考える
Reconsidering Japanese Religious Culture
with a Focus on Buddha Statues

加藤 均^①

大阪大学日本語日本文化教育センター教授

要旨

本稿は、2015年8月21日にチュラーロンコーン大学において日本語専攻の学部生向けに行った講義の内容を文章化したものである。ここでは、日本の宗教文化を理解する糸口として、日本では仏像というものがどのように理解されてきたのか、その展開について解説した。

キーワード：神霊、仏像、神仏習合

Abstract

This is a transcript of my talk on Japanese religious culture with a focus on a development of the understanding of Buddha statues in Japan, given for its undergraduate students majoring in Japanese at the Chulalongkorn University on August 21, 2015

Keywords : divine spirit, Buddha statue, syncretism of Shinto and Buddhism

今日は、質疑応答を含めて45分ほどの講義ということですし、学部の学生の方も多いと聞きましたので、あまり細かい議論に入らず、仏像に着目しながら日本の宗教文化についてすこしお話をさせていただきたいと思います。

タイの方々にとっては、日常生活の中でも仏像は見慣れたものでしょうし、奈良や鎌倉を観光して大仏を見ても違和感はそれほど大きくはないかと思います。しかし、両者には宗教文化的に考えると大きな違いがあります。

^① e-mail : katohi@cjl.osaka-u.ac.jp

仏教が伝来する以前の日本の古代社会では、神霊は目に見えず、遠い山や海のかなたに住むものとして捉えられていました。その姿かたちのない神が人間界に現れてくるときには、一時的に宿る場が必要となります。それを「依り代」と言います。いま、神社で目にする御神木がその一例ですが、自然物だけでなく、鏡・刀や時には人も神霊が依り憑く対象物になります。こういった中、6世紀前半には百済の聖明王から欽明天皇に釈迦仏の金銅像と仏典が届けられます。いわゆる「仏教の公伝」です。

この仏像は当時の人々にとっては、まさに「依り代」だったのです。そして仏は外来の神として「他国神」、「蕃神」と呼ばれることになります。

今の日本人にとっては想像もできないことだと思いますが、仏教の伝来は、衝撃的なものでした。この外来の神は、中国大陸で育まれた思想・文化・制度・技術といったものを同時にもたらすことになったからです。

仏教公伝からずいぶん後の話にはなりますが、例えば、8世紀後半に建立された奈良の大仏は重さが200t以上もあり、それを鑄造するには当然、高度な技術力が要求されます。そのような力を当時の日本が独自に培っていたとは到底考えられません。実際、鑄造を指揮・監督したのは百済からの渡来人の子孫だったのです。

さて、仏教公伝当初は崇仏派と廃仏派の対立が表面化しますが、高度な文明を伴った仏教を排除することなどできようもありません。そこで、日本の神々は、仏に従属することで、その活路を見いだすことになります。ここで出てくるのが神仏習合の考え方です。すでに奈良時代には習合は始まっており、その形態にもいくつかあるのですが、特に平安時代中期の9世紀後半には、神は仏が衆生を救済するため現れた仮の姿であるとする、仏本神述の本地垂迹説が確立したとされます。（政治的に見れば、それぞれの神を祀る氏族が仏教を中軸とした中央集権的国家体制に組み込まれていったことを意味します。）

このように神仏の関係が整理されていくのですが、本地垂迹説に見る本迹の考え方は、もともと天台の法華経の解釈から出てきた、永遠不滅の釈迦と歴史的に実在する釈迦とに区別するためのものです。仏身論で言えば、「法身仏」

と「応身仏」の二身です。

入滅する釈迦を表象する「涅槃仏」はタイではよく見られ、ワットポーの金色の涅槃仏など有名なものも多いのですが、日本ではそういった仏像はあまり見かけません。その理由がここにあります。

涅槃仏は、80年の生涯を終わられ、限りある肉体から開放され完全な悟りに入る釈迦の姿ですから、タイの仏教（上座部仏教）では信仰対象としてもっとも尊敬を集めるのは当然です。一方、日本では、釈迦の位置づけが問題となってきます。例えば、先ほど取り上げた奈良の大仏は、姿や形は釈迦仏と区別がつきませんが、華嚴経という經典に説かれる「盧舎那仏」です。この仏は、世界の存在そのものを象徴する、永遠不滅の法身仏が現前したものなのです。ちなみに、13世紀に造立された鎌倉の大仏も釈迦仏ではなく、法身仏と応身仏の性格を併せ持つ「報身仏」とされる阿弥陀仏です。「法身仏」と「応身仏」にこの「報身仏」を加えた三身論が日本でも定着していきますので、釈迦は仮の姿としてあらわれたものだと考え方が強くなり、涅槃仏自体の価値が低下することになるのです。

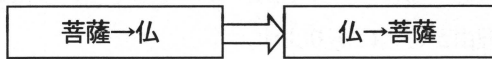
さて、先ほど、当初は、仏像は外来の神の「依り代」と捉えられていたと言いましたが、奈良の大仏などがつくられるようになると、もうそれどころの話ではありません。人間を超越した世界を仏像として具現化することで、国にふりかかる様々な災いを消し去ろうとしたのです。

当時の人々にとって、それは慈悲深い仏というより、強力な力を持った畏怖すべき存在だったのでしょう。だからこそ、身近な神を、実は仏が衆生を救済するため仮に現れたものとする考え方が定着していくのです。

ここで、仏と菩薩の関係にも触れたいと思います。菩薩というのは、もともとは、悟りを求めて、すなわち仏になるために修行する者のことを指します。釈迦も仏になる前は菩薩なのです。そして、大乘仏教では、自らは悟りを求めながらも、人を苦しみから救い、悟らせようする特別な存在を菩薩と考えるようになります。だから菩薩像は仏像と違って、ある意味、人間的に表現されます。

さらに、この菩薩は、悟りを得て仏となったが、衆生を導くために自ら願

って人間として生まれひろく教えを説くものとしても捉えられるようになります。（下図を参照）



本迹の考え方がすれば非常に分かりやすいものです。仏が身近な神として姿を変えたように、仏はまた、菩薩に化身することになります。

皆さんは十一面観音を見たことがあるでしょうか。この菩薩というのは、10種の現世での利益と4種の来世での果報をもたらすといわれており、さまざまな顔の表情が見られるのですが、それに気を取られて、頭部正面に付いている小さな阿弥陀仏を見逃していませんか。これは「化仏（けぶつ）」といって、「本地仏」、すなわち、本来の姿である仏を表象するものです。先ほどから述べてきた神仏の本地垂迹説にしても、本地となるのは仏だけに限られず、こういった菩薩もその役割を担うことになります。

真言密教では、梵語（サンスクリット語）の **梵**（あ）を本尊として行う「阿字観」という瞑想法があります。日本語の五十音図は梵語の文字表を基にして作られたともいわれていますが、この字は第一字母で万物の本源として不生不滅の原理を意味し、法身仏である大日如来をも象徴しているとされます。乱暴な言い方かもしれませんが、法身の世界が仏像ではなく、一つの文字に姿を変えたということで、非常に面白い事例です。

神霊が一時的に宿る「依り代」といったものを考える、アニミズムやシャーマニズムをもとにする古代日本の宗教観は、中国大陸から高度な文明を伴った仏教が伝わることによって、かなり複雑化していきます。とはいえ、仏身の三身論、仏から菩薩への化身、仏・菩薩の神としての応現など、本体的なものは姿・形を変え現れるという発想が日本では非常に強いことが分かるかと思えます。

スーパーヒーローが登場するテレビ番組やアニメでは、「変身」は重要なモチーフとなっていますがその理由は何か、こういった宗教文化的特徴との兼

ね合いで考えてみるのは面白いかもしれません。

すこし取りとめのない話になってしまいましたが、ひとまず講義のほうはこれで終わりにして、質疑応答に入りたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

<参考文献>

末木文美士『中世の神と仏(日本史リブレット)』山川出版、2003

山折 哲雄『神と仏』講談社、1983

義江 彰夫『神仏習合』岩波書店、1996

日本語のアクセントとその規則性

Japanese Accent and Its Regularity

儀利古 幹雄^①

大阪大学大学院言語文化研究科助教

要旨

本稿では、日本語アクセント（東京方言）の基本的な特徴と、その規則性について解説する。まず、日本語のアクセントには、①最初のモーラとその次のモーラのピッチが必ず異なる、②単語内で一度下がったピッチは再び上がることはない、③平板型アクセントを許容する、という大きな特徴があることを説明する。また、日本語の中でも特に外来語のアクセントの有無／位置は規則的に決定されており、多くの場合予測可能である。本稿の後半では、一見複雑に見える様々な外来語のアクセントを紹介し、そのアクセントの有無／位置を決定する規則について考察する。

キーワード：日本語アクセント、アクセント規則、外来語

Abstract

This paper introduces the basic characteristics of Tokyo Japanese accent and its beautiful regularity. Firstly, we explain the main characteristics of Tokyo Japanese accent (e.g., initial lowering, the existence of the unaccented pattern, etc.).

Secondary, we introduce loanword accent in Tokyo Japanese which is seemingly complex. Then we consider several rules which determine the presence/absence of accent and accent locus and show that they are predictable in many cases.

Keywords : Japanese accent, accent rule, loanword

^① e-mail : giriko@lang.osaka-u.ac.jp

1. はじめに：日本語アクセントの特徴

アクセント (accent) という用語は、日常生活の様々な場面で用いられる。たとえば、「ファッションにおけるアクセント」と言えば、モノトーンのコーディネートの中にいわゆる鮮やかな「差し色」を入れて、そこを際立たせることなどを意味する。また「味におけるアクセント」と言えば、優しい味の中に少しピリッとするスパイスが効いていることなどを意味する。両方において共通しているのは、アクセントとは「際立っていること、または際立っている部分」のことを意味するということである。

音声におけるアクセントも同様である。具体的に述べると、ある語（または句、文）において、特定の韻律要素が他よりも際立って聞こえるとき、その要素にアクセントがあると言う。日本語においては、ある特定の要素の際立ちを、ピッチの高低（音の高低）で表す。そのため、日本語は類型論的にピッチアクセント言語に分類される。また、語のある特定の位置でピッチの急激な下降が生じたとき、その下降の直前の音にアクセント（アクセント核）があると表現する。具体的な例を(1)に示す。(1a)の場合、初頭モーラと第2モーラの間でピッチが急激に下降するため、アクセントは初頭モーラにあることになる。(1b)の場合は、第2モーラと第3のモーラ（最終モーラ）の間でピッチが急激に下降するので、第2モーラにアクセントがあることになる。(1c)の場合は、最終モーラと助詞「が」の間でピッチの下降が生じるため、最終モーラにアクセントがあることになる。

- (1) a. い い のち が (命が)、か め ら が (カメラが)
b. は な や が (花屋が)、こ こ ろ が (心が)
c. お と こ が (男が)、お ん な が (女が)

日本語（東京方言）のピッチアクセントの大きな特徴としては以下の3点が挙げられる。まず、原則的に初頭モーラとその次のモーラのピッチは必ず異ならなければならないということである。即ち、初頭モーラのピッチが高ければ、

その次の第2モーラは低く実現されなければならないし、初頭モーラのピッチが低ければ、その次の第2モーラは高く実現されなければならない。特に、初頭モーラが低く第2モーラが高く実現される現象は **initial lowering** と呼ばれ、日本語の平板型アクセントの一つの特徴である (Haraguchi 1977, Pierrehumbert and Beckman 1988)。これらのことは (1) の例からも明らかである。(1a) では初頭モーラのピッチが高いので、第2モーラが低く実現されている。一方、(1b) と (1c) においては初頭モーラのピッチが低いので、第2モーラが高く実現されている。ただし、これには例外がないわけではなく、初頭音節が重音節 (**heavy syllable: H**) である場合は語頭2モーラのピッチは「高高」として実現されることがある。これは東京方言に顕著に観察されると特徴である。(2) に例を挙げる。

- (2) とうきょう ～ とうきょう (東京)
おおさか ～ おおさか (大阪)

2つ目の東京方言のアクセントの特徴は、1度下がったピッチはその語の中で2度と上昇することはないということである。このことは、少なくとも東京方言においては、1つの語の中にアクセントは1つしか許容されず、2つ以上アクセントが出現することは許されないということを示している。再び(1)の例を見てみると、すべての語において、1度下降したピッチが再び上昇することはないことがわかる。ただし、これは飽くまで東京方言に当てはまることであり、方言によっては1つの単語の中に2つのピッチの下降が許容されるものもある。たとえば、鹿児島県喜界島方言などがそれに該当する。(3) に例を示す。

- (3) めえらび (若い女性)

3つ目の日本語アクセントの特徴は、日本語は、ストレスアクセント言語と

異なり、内容語において卓立のない、いわゆる「無核」の状態——平板型アクセント——を許容するということである (Hyman 2006)。平板型アクセントの例を(4)に挙げる。

- (4) あめりか (アメリカ)、 ぶら^ろず^ま (プラズマ)
まにと^ば (マントバ)、 いたりあ (イタリア)

ただし、ピッチアクセント言語であればどの言語も平板型アクセントを許容するわけではない。たとえば、ギリシャ語や古代サンスクリット語は、必ず語内においてアクセント核が置かれることを必要とする。それに対して、バスク語やソマリ語は、日本語と同様に、平板型アクセントを許容する言語である (Itô 2010)。このような観点から見ると、平板型アクセントを許容するということは、他言語と比較したときの最も際立った日本語の韻律的特徴であると言える (Kubozono 2006 他)。さらに、日本語における語彙のアクセントの約半数は平板型アクセントであり (田中・窪菌 1999)、外来語を除くとその生起頻度は実に6割強にまで増加する (柴田 1994)。これらの統計的な事実も、日本語における韻律的特徴の中でも最も顕著なものは平板型アクセントの存在であるということを示唆している。

以上、本節では、日本語アクセントの主要な特徴について概観してきた。次節以降では、特に日本語の外来語についての語例を示しながら、アクセントの有無 (起伏型アクセント vs. 平板型アクセント) や位置がどのように決定されているのか、また、その背後に潜むアクセント規則について論じる。

2. 日本語における外来語アクセントとその規則性

ある語が起伏型アクセントで発音されるか、または平板型アクセントで発音されるかはどのように決まっているのだろうか。また、ある語が起伏型アクセントを取るとして、そのアクセント位置はどのように決定されているのだろうか。これらの問いに答えるためには、日本語アクセントの規則性について考察

しなければならない。結論から述べると、日本語アクセントは様々な規則に支配されており、それらの規則によってアクセントの有無や位置は決定されているのである。

2.1 アクセントの位置に見られる規則性

まず、(5)の例について考えてみよう。これらはすべて外来語であるが、日本語の外来語アクセントは他の語種（和語や漢語）と比較して、かなり規則的にその位置が決まっている（以降では、アクセント核のあるモーラを○のよりに示す）。

- (5) a. カ[○]メラ ‘*camera*’
- b. スト[○]レス ‘*stress*’
- c. クリス[○]マス ‘*Christmas*’
- d. インドネ[○]シア ‘*Indonesia*’

上記の(5)に挙げた外来語のアクセント位置の共通点を見出すには、語の中の何番目のモーラにアクセントがあるかを考えなければならない。そしてその際には、語頭からモーラを数えていても共通点は見つけられない。たとえば、(5a)の「カメラ」という語には初頭モーラにアクセントが置かれているし、(5b)の「ストレス」には第2モーラ、(5c)の「クリスマス」には第3モーラ、(5d)の「インドネシア」には第4モーラにアクセントが置かれている。これでは、これらの語のアクセント位置について共通点は見出だせず、外来語のアクセント位置は1つ1つの語ごとに記憶しなければならないことになってしまう。一方、語末からモーラを数えると、そこには美しい規則性が見えてくる。(5)に挙げた単語のアクセント位置を語末から数えてみると、すべての語において、アクセントは「語末から3モーラ目」に置かれている。即ち、(5)に挙げたような外来語のアクセントの位置は、(6)の様な規則によって決定されていると考えられる。(7)は(5)に語末から数えたときのモーラ数を付け加えたものであ

る。これを見ると、すべての語においてアクセントが語末から3モーラ目に置かれていることがよりよく理解できる。

(6) 語末から3つ目のモーラにアクセントを付与せよ。

(7) a. カ メ ラ *'camera'*

3 2 1

b. スト^レス *'stress'*

4 3 2 1

c. ク リ ス マ ス *'Christmas'*

5 4 3 2 1

d. イ ン ド ネ シ ア *'Indonesia'*

6 5 4 3 2 1

次に(8)の例について考えてみよう。(8)に挙げた語においては、すべてアクセントが語末から3つ目のモーラに置かれておらず、語末から4番目のモーラに置かれている。

(8) a. スウェーデン *'Sweden'*

b. プノンペン *'Phnom Penh'*

c. モランボン *'morabong'*

d. トライアル *'trial'*

これらの例は、一見(6)の規則の例外に見える。しかし、語末から3モーラ目に着目すると、(8)のすべての語においてその位置が特殊拍(長音、撥音、促音、二重母音の第二要素)によって占められていることがわかる。そして、東京方言においては、特殊拍はアクセントを担えないことがよく知られている。これらのことから、(8)の例は(6)の例外ではなく、語末から3モーラ目が特殊拍でありそこがアクセントを担えないため、アクセントが左に1つシフトした

ものであると考えることができる。このことを規則として表すと (9) のようになる。

(9) 語末から3つ目のモーラにアクセントを付与せよ。

ただし、そこが特殊拍であった場合は、アクセントを1つ左に移動させよ。

上記の (9) の規則に音節 (syllable) という概念を導入すると、この規則は (10) のように、より単純に記述することができる。(10) の規則があれば、(5) の例も (8) の例も統一的に説明できる。これは McCawley (1968) で ‘antepenultimate rule’ と呼ばれているものであり、大半の日本語の外来語アクセントの位置を説明する規則である。

(10) 語末から「3つ目のモーラを含む音節」にアクセントを付与せよ。

ただ、語長がもともと2モーラしかない語には、もちろん「後ろから3モーラ目を含む音節」が存在しないので、アクセントは語末から2モーラ目に付与されることに注意されたい。(11) に語例を挙げる。

(11) ドア ‘*door*’、バス ‘*bus*’、ガス ‘*gas*’、ベル ‘*bell*’

ただし、(10) の規則によって、起伏型で発音されるすべての外来語アクセントについて説明できるわけではない。(12) に挙げる例は、(10) の規則ではそのアクセント位置が説明できない語例である。

(12) a. エンデバー ‘*Endeavor*’、ペンタゴン ‘*pentagon*’

b. エナジー ‘*energy*’、ドラゴン ‘*dragon*’

(12a) の語は、語末から数えて5モーラ目にアクセントが置かれている。また、

(12b)の語は、語末から3モーラ目が特殊拍ではないにも関わらず、語末から4モーラ目にアクセントが置かれている。そのためこれらの語のアクセント位置は(10)の規則からは予測できない。ただ、これらのような語のアクセント位置にも規則性は観察される。たとえば、(12a)に挙げた語の音節構造はHLHとなっている(L: light syllable, 軽音節)。また、(12b)の語の音節構造はLLHである。これらに共通するのは、語末2音節の構造が...LH#となっていることである(#は語境界を示す)。つまり、語末の音節構造がLHである外来語のアクセントは、語頭に置かれやすいという一般化が可能なのである(Katayama 1995, Kubozono 1999, Shinohara 2000)。このことから、(10)の規則でアクセント位置を説明できない語であっても、その中にある程度の傾向性や規則性は観察できるということが出来る。例外の中にも、規則は存在するのである。

2.2 平板型アクセントに見られる規則性

次に、日本語の最も際立った韻律的特徴である平板型アクセントについて考察する。(13)の例を見てみよう。これらの語はすべて平板型アクセントで発音される(○は平板型アクセントを表す)。

- (13) a. アメリカ[○]‘America’, イタリア[○]‘Italia’, プラズマ[○]‘plasma’
 b. コンソメ[○]‘consommé’, ウクレレ[○]‘ukulele’, モルヒネ[○]‘morphine’
 c. ステレオ[○]‘stereo’, メキシコ[○]‘Mexico’, ストロボ[○]‘strobe’

(13)に挙げた語例の共通点は一見してすぐ理解できる。(13)の語例はすべて、全体として4モーラなのである。このことから、4モーラの外来語は平板型アクセントで発音されるという一般化が可能になる(Kubozono 1996)。

ただ、全体として4モーラであるのに、平板型アクセントで発音されない外来語も多数観察される。(14)に語例を示す。

- (14) a. エナジー ‘*energy*’, ドラゴン ‘*dragon*’, コロニー ‘*colony*’
 b. ドロップ ‘*drop*’, スタント ‘*stunt*’, バレード ‘*balad*’

これらの語はすべてピッチの下降を伴う起伏型で発音される。(13)の語と(14)の語の相違点は、語末の音節構造にある。(13)の語の語末の音節構造はすべて軽音節の連続(LL#)となっている。一方、(14)に挙げた語の音節構造は、重音節(H#)もしくは重音節+軽音節(HL#)となっている。以上のことを考えると、平板型アクセントで発音される外来語の語末2音節の構造は、軽音節の連続でなければならず、語末2音節に重音節を含む場合は起伏型アクセントで発音されるという一般化が可能になる(Kubozono 1996)。

また、(15)に挙げる語は、全体が4モーラ且つ語末が軽音節の連続であるという条件を満たしているのにもかかわらず平板型アクセントで発音されない。

- (15) アクセス ‘*access*’, アクセル ‘*accelerator*’, モロゾフ ‘*Morozoff*’

これらの語と(13)の相違点は、語末の母音にある。(13)の語における語末のモーラに含まれる母音は、すべて原語においても存在する基底母音である。一方、(15)の語における語末のモーラに含まれる母音は、すべて挿入母音(epenthetic vowel)である。これらの母音は、もともと原語に存在したわけではなく、日本語に借用する際に日本語の構造に合わせるために挿入されたものである。(16)では、挿入母音を<..>で囲って示す([]は音節境界を表す)。

- (16) a. アクセス : a.k<[]>.æ.s<[]>.
 b. アクセル : a.k<[]>.æ.r<[]>.
 c. モロゾフ : mo.ro.zo.h<[]>.

このことから、全体が4モーラ且つ語末の音節構造が軽音節の連続であっても、語末の母音が挿入母音だと平板型アクセントで発音されないということがわか

る (Kubozono 1996)。以上のことをまとめると、外来語が平板型アクセントで発音される条件は(17)のようになる。これらの条件をすべて満たした外来語は約 90%の確立で平板型アクセントで発音される (柴田 1994)。

- (17) a. 語全体が4モーラであること
b. 語末が軽音節の連続(..LL#)であること
c. 語末の母音が基底母音であること

ただし、(17)の条件をすべて満たしても平板型アクセントで発音されない語も少なからず存在する。(18)に語例を挙げる。

(18) ハレルヤ '*hallelujah*'、ミネルバ '*Minerva*'、クエルボ '*Cuervo*'

これらの語は全体として4モーラであるし、語末が軽音節の連続で且つ語末が基底母音となっている。しかし、これらの語はすべて平板型アクセントで発音されず、アクセントが語末から3モーラ目に置かれている。これらの語に共通することは、語末から2モーラ目が「ル」であるという点である。儀利古 (2009a)は、「ル」はモーラは構成するが音節性を喪失しており、先行するモーラと再音節化され重音節のように振る舞うと述べている。その結果、表層ではLLLL構造に見える外来語であっても、語末から2モーラ目が「ル」である場合はLHL構造の外来語と同様に振る舞う。そのためこれらの語は、深層構造において(17b)の条件を満たさなくなり、平板型アクセントで発音されなくなるという訳である。この現象も、例外に見える語の中にも一定の傾向性や規則性が存在することを示している。

また、(17)の条件を満たしていないのにも関わらず、平板型アクセントで発音されるというタイプの例外も存在する。(19)に語例を挙げる。

(19) a. インスリン⁰'*insulin*'、セロトニン⁰'*serotonin*'、メラトニン⁰'*melatonin*'

- b. エチオピア⁰ ‘*Ethiopia*’, ナイジェリア⁰ ‘*Nigeria*’, オセアニア⁰ ‘*Oceania*’
- c. ランニング⁰ ‘*running*’, リスニング⁰ ‘*listening*’, ヒアリング⁰ ‘*hearing*’

これらの語は、全体として4モーラではないのに平板型アクセントで発音される。これらに共通する点としては、それぞれ語末に特定の音連鎖を有していることが挙げられる。まず、(19a)は語末に /Cin/ という音連鎖を有している (Cは任意の子音を表す)。次に(19b)は語末に /Cia/ という音連鎖を有している。最後に(19c)は語末に /Cingu/ という音連鎖を有している。儀利古(2009b)は、(19)に挙げた語の構造を分析し、これらは「擬似複合構造」を成していると提案した。即ち、(19)の語はすべて一見して単純語 (simplex) に見えるが、日本語話者はこれらを「X+/Cin/, /Cia/, /Cingu/」という複合語 (前部要素+擬似形態素) として認識しており、そのため単純語のアクセント規則ではなく、複合語のアクセント規則で全体のアクセント型が決まっているということである。たとえば、儀利古(2009)は、語末の /Cin/ が「心臓病」の「病」のように平板化形態素 (deaccenting morpheme) (McCawley 1968) として機能しているため、「インスリン」は「心臓病」のように平板型アクセントで発音されると述べている (O_{deacc}はその形態素 (もしくは擬似形態素) が平板化形態素であることを示している)。これも、一見例外的に見える事例であっても、その背後には整然とした原理が働いていることを示している現象であるといえる。

- (20) a. インスリン⁰ → インス+リン_{deacc} ‘*insulin*’
 - b. エチオピア⁰ → エチオ+ピア_{deacc} ‘*Ethiopia*’
 - c. ランニング⁰ → ラン+ニング_{deacc} ‘*running*’
-
- (21) a. しんぞう+びょう → しんぞうびょう⁰ (心臓病)
 - b. せいしん+びょう → せいしんびょう⁰ (精神病)
 - c. ぱーきんそん+びょう → ぱーきんそんびょう⁰ (パーキンソン病)

なお、(22)に挙げる語も(17)の例を満たしていないのにも関わらず、平板型アクセントで発音される。

(22) ピアノ⁰ *'piano'*、ガラス⁰ *'glass'*、コップ⁰ *'cop'*

これらの語が平板型アクセントで発音されるのは、これまで見てきたような語の音韻構造によるものではない。これらの外来語は、古くから日本語に借用されている語であり、普段良く使われるものである。このような特徴を有する外来語は、(15)の条件を満たしていなくても平板型アクセントで発音される傾向にある。

3. 結語

本稿では、日本語のアクセントの主要な特徴について概説した上で、日本語の外来語アクセントについて取り上げ、それらのアクセントの有無や位置を決定する規則や原理について考察した。

外来語アクセントは一見複雑に見え、無秩序に決定されているようにも思えるが、その背後には美しい規則性／法則性が潜んでいる。このような外来語アクセントを決定する様々な規則が、日本語母語話者の頭の中に確かに存在することを端的に示すのが、無意味語 (*nonsense words*) のアクセントである。(23)の語は、日本語に存在しない意味を持たない語であるので、日本語母語話者はこれらの語を初めて目にすることになる。しかし、初めて目にする語であっても、日本語母語話者は、規則が予測する位置に正しくアクセントを付与できる。

(23) a. ダラマ⁰ケナ

b. ピグモラ⁰

c. ナゲミス

d. スグムリン⁰

(23a)は、日本語話者の大多数が(10)の規則に従い、語末から3モーラ目にアクセントを置いて発音する。(23b)は(17)の条件を満たすので、初めて見る語であっても平板型アクセントで発音される。(23c)は(15)の「アクセス」と同じように語末が「ス」であるため、母音が挿入母音であると推測され、その結果4モーラであっても起伏型アクセントで発音される。最後に(23d)の語は、語末が「リン」であることから、(20)のように平板型アクセントで発音される。このように、日本語母語話者は初めて見る無意味語であっても正しいアクセント位置を予測できることから、日本語母語話者の頭の中にアクセントに関する規則が厳然と存在しているということがわかる。

また、本稿では外来語アクセントを中心に議論したが、漢語のアクセントもある程度予測可能である。小川(2006)は、2字から成る漢語のアクセントを包括的に調査し、語の音節構造からある程度アクセントの有無は予測可能であると述べている。具体的には、(24)に示すように、2字漢語の音節構造がHLである場合は起伏型アクセントが生起やすく、LHの場合は逆に平板型アクセントが生起しやすくなると述べている。なお、小川(2006)は、音節構造が重音節を含まないLLLの場合でも、LL+L構造の方がL+LL構造よりも起伏型アクセントで発音されやすいことも指摘している。

- (24) a. HL: かいご⁰ (介護)、せいし⁰ (生死)、かんか⁰ (感化)
b. LH: ごかい⁰ (誤解)、とうし⁰ (投資)、ほてん⁰ (補填)

このように、外来語ほどではないにしろ、漢語のアクセントもその音節構造からある程度は予測可能である。

本稿の最後に、日本語の諸方言のアクセントについて述べる。本稿では日本語の中でも東京方言を扱ってきたが、日本語の諸方言のアクセントにも美しい規則性は潜んでいる。例として、鹿児島方言を取り上げる。鹿児島方言は語彙の長さに関わらず2つのアクセント型しか許容しない2型アクセント体系である(平山 1951、木部 2000)。1つは語末から2音節目が高くなるA型で、も

う 1 つは語末の音節が高くなる B 型である。(25) に例を示す。

- (25) a.A型: かえて
b.B型: もみじ

これらが複合語を形成するときに規則性は現れる。具体的には、複合語の最初の要素が A 型の場合は複合語全体も A 型になり、最初の要素が B 型のときは複合語全体も B 型になる。これは複合法則と呼ばれるもので (平山 1951)、伝統的な鹿児島方言を特徴づけるものである。(26) に例を示す。

- (26) a.A型: あか (赤) → あかえんびつ (赤鉛筆)
b.B型: あお (青) → あおえんびつ (青鉛筆)

また、(26) の語に助詞をつけた句表現においても、この法則は守られる。(27) に句表現の例を挙げる。

- (27) a.A型: あかえんびつが (赤鉛筆が)、あかえんびつから (赤鉛筆から)
b.B型: あおえんびつが (青鉛筆が)、あおえんびつから (青鉛筆から)

このように、東京方言以外の方言であっても、アクセントの決まり方には規則性が観察される。このようなアクセントの規則性は鹿児島方言だけでなく、多くの諸方言において観察されているものである。

<参考文献>

- Haraguchi, Shosuke (1977) *The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha.
Hyman, Larry M. (2006) Word-prosodic typology. *Phonology* 23: 225-257.
Itô, Junko (2010) Unaccentedness and the perfect prosodic word. Presented at

- Biwako Phonology Festa (Feb. 18, 2010).
- Katayama, Motoko (1995) Loanword accent and minimal reranking in Japanese. *Phonology at Santa Cruz (PASC)* 4: 12-28.
- Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent in Japanese: evidence from loanword accentuation. *The Bulletin (Phonetic Society of Japan)* 211: 71-82.
- Kubozono, Haruo (1999) Mora and syllable. In: Tujimura, N. (ed), *The Handbook of Japanese Linguistics*, pp. 31-61. Oxford: Blackwell.
- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from?: A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140-1170.
- MacCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Pierrehumbert, Janet and Mary Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*. Cambridge MA: MIT Press.
- Shinohara, Shigeko (2000) Default accentuation and foot structure in Japanese: evidence from Japanese adaptations of French words. *Journal of East Asian Linguistics* 9: 55-96.
- 儀利古幹雄 (2009a) 「外来語の語中における音節性の喪失—*ru*、*su*の振る舞いの特殊性について—」 『日本語学会第 139 回大会予稿集』 東京：日本語学会.
- 儀利古幹雄 (2009b) 「日本語における語認識と平板型アクセント」 博士論文, 神戸大学.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』 東京: 学界の指針社.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』 東京: 勉誠出版.
- 小川晋史 (2006) 「日本語諸方言の 2 字漢語アクセント」 修士論文, 神戸大学.
- 柴田武 (1994) 「外来語におけるアクセント核の位置」 佐藤喜代治 (編) 『現代語・方言の研究』 388-418. 東京: 明治書院.
- 田中真一・窪菌晴夫 (1999) 『日本語の発音教室—理論と練習—』 東京: くろしお出版.

初対面の会話における話題転換のパターン—日タイ対照研究—
A Comparative Study on Patterns of Topic Shifts in First-encounter
Conversations in Thai and Japanese Speakers

ユッパワン・ソーピットヴッティウオン⁽¹⁾

チューラーロンコーン大学日本語講座講師

要旨

本稿は、日本語母語話者とタイ語母語話者の初対面会話において、会話参加者がどのように話題を変えるのか、という話題転換のパターンの使用傾向を調べることを目的とするものである。日本語母語話者とタイ語母語話者それぞれ8組の準自然会話データを分析した結果、会話参加者が一緒に先行話題を終了させ、新しい話題を開始するという「協働的転換」パターンが使用されているという共通点を持ちながらも、相づち表現の豊富な日本語では、会話が終了するまで相づちを交えたやりとりがしばらく続く傾向が見られたのに対して、タイ語の方は、相づちが比較的少ない分、会話の終了部分がより短いことがわかった。また、タイ語にのみ、突然話題を転換する「突発的転換」が比較的多く用いられていることが分かった。

キーワード：初対面の会話、話題転換、転換パターン、日本語、タイ語

Abstract

This research comparatively studies patterns of topic shifts employed by native Thai and native Japanese speakers having their first-encounter conversations. Participants are divided into two groups, Thai and Japanese. In each group, 8 voice records of a pair of participants conversing in their native language in a semi-authentic setting are used for a data analysis. The data analysis finds that the

⁽¹⁾ e-mail: yuphawan.s@chula.ac.th

participants in both groups tend to use a collaborative topic shift method more than other methods. However, there are differences between the two groups of participants. Japanese participants occasionally use back-channel expressions, which are frequently found in Japanese language, in order to close a former topic and begin a new one, extending their conversation for a longer period of time before a conversation really ends. In contrast, having fewer back-channel expressions than Japanese, a topic can, as a result, be closed in a shorter period of time in Thai. Keywords: first-encounter conversation, topic shift, back-channel expressions, Thai language, Japanese language

1. はじめに

同じ国の人々が初めて会話を交わすとき、話す内容や話し方やバラ言語などを考慮に入れているにも関わらず、ときどき誤解や不愉快さなどが生じることがある。まして異なる国の人々同士が会話を交わすとなれば、母語の影響などで、誤解がより招きやすくなることは容易に想像されるだろう。この問題意識のもと、タイ語母語話者である筆者が本国で日本人と話しているタイ人の日本語学習者の会話を観察してみると、やはりいくつかの違和感を持つ。特に話題を変えるとき、タイ人は、前に話した事柄と関係のない新しい話題を唐突に導入することが比較的多い。なぜそのようなことが起きるのか、またそれは本当にタイ人ならではの話し方なのか疑問である。そこで、話題の選択、スピーチレベルの選択等、相手との会話に最も気を遣うと考えられる初対面場面でのタイ人同士の会話と日本人同士の会話の比較し、それぞれの話し方の特徴、特に話題転換の仕方を中心に検討してみたい。

なお、本稿は、初対面会話における話題選択のスキーマとその戦略の分析を行った Yuphawan (2016) と同様の音声データを用いたものである。そのため、必要に応じて、Yuphawan (2016) を援用する。

2. 先行研究

初対面会話に関する研究は、話題選択やスピーチレベルシフトや自己開示などの様々な視点から議論されている（三牧 1999、陳 2003、奥山 2000 など）が、本稿では紙幅の都合上、話題転換に関する先行研究のみを取り上げる。話題転換に関する先行研究は、会話参加者の相互行為という観点から分析した転換のパターンを提示するもの（West & Garcia（1988）、村上・熊取谷（1995）、楊（2005））、話題の開始部と終了部にのみ着目し、そこで用いられる転換ストラテジーを研究するもの（村上・熊取谷（1995）、中井（2003）、楊（2005））がある。

West & Garcia（1988）は、相互行為の視点から話題転換を分析した先駆的研究だと言える。5組の異性同士の大学生の音声を使用して分析した結果、話題転換は主に会話参加者の協同的な作業であり、男女の違いに言及すれば、男性のほうがよく話題転換をすると述べている。

村上・熊取谷（1995）は、相互行為の観点から三人の会話を分析し、話題転換のパターンを「継続型」「断続型」「割り込み型」の3種類に分類した。また、転換する際の先行トピックの終了部と後続トピックの開始部に現れる言語行動・非言語行動も考察した。さらに、トピックの展開構造は「線状構造」と「階層構造」から成ると報告している。村上・熊取谷が話題転換を様々な観点から分析したことは、今後の研究の参考になると言えるが、話題転換のパターンのうち「継続型」と「断続型」の違いが次の話題が来るまでの時間の長さによってのみ判断される。そのため、長い沈黙が生じた場合は「断続型」と一律に分類しているが、この点においては疑問が残る。

中井（2003）は、初対面会話の開始部と終了部の部分に用いられる言語的要素の特徴を分析した研究である。少量のデータを扱う質的研究だが、日本語会話の開始部と終了部に使用される言語的要素の特徴が明らかになったという点では、日本語の指導に役立ち、有益である。しかし、会話が進むと共に言語的要素の使用傾向や非言語的な要素などがどのように変化していったかについては言及されていない。

楊（2005）は、接触場面における中国人の日本語学習者と日本語母語話者の話題転換のパターンとストラテジーの使用について分析した研究である。中国人の日本語学習者は、会話参加者が共に話題修了ストラテジーを使用した後に話題が変換される「協働的転換」の使用が日本語母語話者の6割にとどまり、話題転換の際に用いられるストラテジーに関しては、話題終了ストラテジーを使用せず、新しい話題を導入する（「無表示転換」する）中国人の日本語学習者が大半を超えたという。また、話題を開始するストラテジーに関しては、日本語母語話者は「認識の変化を示す感動詞」を最も多く使用しているのに対して、中国人の日本語学習者は「言いよどみの表現」を最も多く使用しているという違いを指摘している。楊の研究から、話題を転換させる際、転換パターンとストラテジーが密に関係しており、その使用の違いの背景には母語の影響があることが考えられる。しかし、N1 と N2 の日本語能力の異なる人を対象にしたことが、データの結果に少なからず影響を与えているのではないかと推測される。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、日本語母語話者とタイ語母語話者が初対面の会話において、それぞれどのような話題転換のパターンとストラテジーを使用するのかを調べ、またその言語行動がどのような文化的背景に裏付けられているのかについて考察したい。

3. 研究方法

3.1 データ収集について

本稿は、2014年10月～2015年1月にかけてタイの某国立大学で20代のタイ語母語話者の女子学生8組にタイ語の会話の録音に協力してもらい、データを収集した。録音する際、初めて会う同学年の学生2人に約束の時間通りに待ち合わせ場所に来てもらってから、筆者は「今から15分間自由に相手と会話をしてください」と指示を出し、ICレコーダーで録音を開始して、その場を去った。そして、15分後、筆者はその場所に戻り、フォローアップインタビューを行った。一方、日本語母語話者の日本語会話データは、タイでは初対面

である学生同士の日本語会話を録音することが困難であったため、本稿では「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版」というコーパスの許可を得て、その中からタイ語母語話者と設定条件が一致している（①初対面会話であること ②女子学生同士の会話であること ③会話の長さが15分であること）会話を8つ抽出して、分析対象とした。

3.2 データの処理方法

文字化の作業は、日本語のデータに合わせるため、BTSJの文字化のシステムを使用してタイ語の会話を文字化した。

データを分析する際、まず、得られたデータを「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その会話の集合体に共通した概念を『話題』とする。」（三牧 2013 : 167）という三牧の話題の定義に従い、話題の区切り作業を行った。日本語能力の高いタイ語母語話者1名にも話題の区切り作業を協力してもらい、筆者が区切った話題と一致しているかを照らし合わせ、一致していない場合は、協議して結論を下した。なお、本稿で分析対象となる話題とは、内容の大まかなまとまりである大話題のみ（例えば「留学」などで、「留学の期間」、「留学先の観光名所」など大話題を成す小話題を分析対象としない。

結果を述べる際、先行話題が終了する部分と新規話題が導入される部分に注目するため、下の会話例1のように本稿の分析対象となっている発話を点線ボックスで囲んでいる。そして、会話参加者がどのようなストラテジーによって会話を終了させるのか、また、新規話題を導入するのかという終了・開始ストラテジーの使用に関して、話題終了ストラテジーは先行話題の最後にあるボックス内(話題区切り線の上)の発話、話題開始ストラテジーは新規話題の最初にあるボックス内(話題区切り線の下)の発話に注目して考察する。

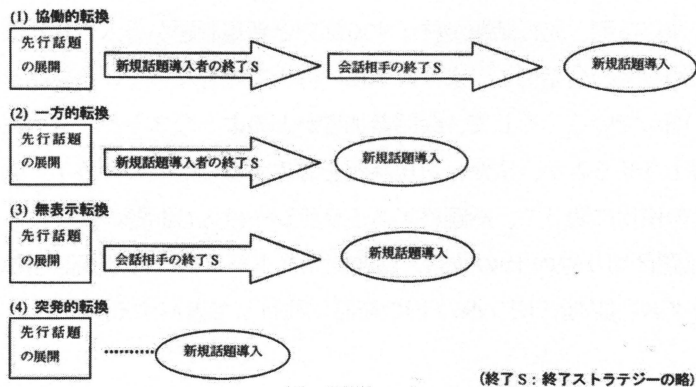
会話例1 {共通の体験} ⇒ {専門}

37	J4	はー、えー、えそれじゃー、『依頼者の苗字』さんがー、じゃー日本語を、教えてーらっしゃるっていう関係で、来たーのー、かな?。	
38	J3	いやなんか(うん)、いや、そういうわけでもないんですけども(ん)。	
39	J3	なんかわたしのほんとに知り合いの人、が(うーん)、その知り合いひ、く笑い(うんうん)、知り合いの人から、あの職場の人から(ん)、来たから、あのー、そういうメールをもらったので、,	
40	J4	ふん、そうなんだ。	
41	J3	そいでメールをして、全く(うんうん)、知らないです。	
42	J4	あそうか。	
43	J4	そうなんだ[息を吸う]えー。	← 先行話題の終了ストラテジー
44	J4	何勉強してらっしゃいます?。	← 新規話題の導入ストラテジー
45	J3	社会学です。	↑ 話題の区切り
46	J4	社会学?。	

3.3 データの分析基準

話題転換を分析するにあたって、相互行為の観点から分類した楊 (2005) の話題転換パターンを基にデータを分析する (図 1)。図 1 はそれぞれの転換パターンの概要を示している。

図 1 楊 (2005) の分類した話題転換の 4 パターン



(楊 2005 : 34)

- (1) 「協働的転換」：会話参加者双方が先行話題に終了ストラテジーを用いてから、新規話題を導入するもの
- (2) 「一方的転換」：新規話題導入者は先行話題に終了ストラテジーを用いるが、先行話題の話し手からの終了ストラテジーを待たず、そのまま新規話題を導入するもの
- (3) 「無表示転換」：先行話題の話し手は先行話題に終了ストラテジーを用いるが、話題導入者は終了ストラテジーを用いず新規話題を導入するもの
- (4) 「突発的転換」：会話参加者双方は先行話題に終了ストラテジーを用いていないまま新規話題を導入するもの

話題を転換する際に、会話参加者がどのようなストラテジーを使って会話を終了、また、開始するのかという話題終了ストラテジーと話題開始ストラテジーに関しては、それぞれの母語話者が好んでいるものをまとめるために、図 2 の楊 (2005) の分類を用いることにした。なお、本稿は話題転換パターンを中心に分析するため、各種類の転換ストラテジーの使用頻度や、使用効果などは分析対象外とする。

図 2 楊 (2005) の話題転換ストラテジーの分類

■終了ストラテジー		主な先行研究
相づち	「はい」「うん」「ふうん」などの短い表現。応答として使われるものは含まない	メイナード(1993)、村上・熊取谷(1995)
まとめや評価	話題の内容(自分の話と相手の話両方を含む)をまとめ、評価する発話	メイナード(1993)、村上・熊取谷(1995)、中井(2003)
笑い	はっきりとした呼気を伴う笑いで、微笑みは含まない	水川(1993)、メイナード(1993)
くり返し	自分または相手の発話の一部または全部をくり返し発話、ただし相手に確認を要求するものは除く	メイナード(1993)、中田(1991)、中井(2003)
■開始ストラテジー		
言いよどみ表現	「あのう」「えっと」等会話の展開、内容などを示す手がかりとなる表現	村上・熊取谷(1995)、田窪・金水(1997)、中井(2003)、木暮(2002)
接続表現	「でも」「それで」等先行話題とのつながりを示す表現	佐久間(1990)、メイナード(1993)
認識の変化を示す感動詞	「えっ」、「あっ」等会話の方向性が変わったことを示す感動詞	村上・熊取谷(1995)、田窪・金水(1997)、木暮(2002)
呼びかけ	相手の名前を呼びかけとして用いる場合	村上・熊取谷(1995)、前原(2000)
メタ言語表現	「話は変わるが」等話題として取り上げられることを示す表現	メイナード(1993)、西條(1996) ¹

(楊 2005: 34)

4. 分析結果

本稿で扱う話題転換の数は、初対面会話における話題選択のスキーマとストラテジーのタイ日対照研究である Yuphawan (2016) の分析結果を用いる。

表 1 は 15 分間の会話において日本語とタイ語、それぞれの母語話者が話題転換した回数を表すものである。Yuphawan (2016) では、表 1 で見られる話題数の違いは日本語母語話者とタイ語母語話者の言語行動の違いに原因があると分析している。つまり、日本語母語話者はある話題を取り上げたら、その話題を深く追究していく共同作業を行う傾向が見られるのに対して、タイ語母語話者は初対面の相手をあらゆる面から知るために、頻繁に話題転換をして情報を得ようとしているのではないかと説明されている。そこで、本研究ではそれに関連して話題を変えるとき、両言語の母語話者がどのような行動をとるのかという点に注目したい。

表 1 日本語母語話者とタイ語母語話者別の話題数の比較^②

組	ペア	日本語母語話者の 話題数	ペア	タイ語母語話者の 話題数
1	191	5	R-P	17
2	193	10	TP	8
3	194	9	VR	13
4	197	6	C-T	14
5	251	9	P-P	7
6	252	3	C-J	9
7	253	8	M-R	8
8	254	6	P-N	8
合計		56		84

Yuphawan (2016)

次に、4.1「転換パターンの使用傾向」で、それぞれタイ語と日本語母語話者が使用した話題転換パターンの傾向の結果を述べ、4.2「話題転換の相互行為」で各転換パターンにおけるそれぞれの母語話者の相互行為の観点から結果を述べる。

^② 表の内容は筆者によって翻訳されたものである。

4.1 転換パターンの使用傾向

以下の図3は、話題転換する際日本語母語話者とタイ語母語話者が使用したパターンの傾向を示すものである。なお、グラフ内で表示されている使用率は次のような計算方法で抽出されたものである。

$$\text{転換パターン} \div \text{総回数} \times 100$$

図3 日本語母語話者とタイ語母語話者の話題転換パターン^③

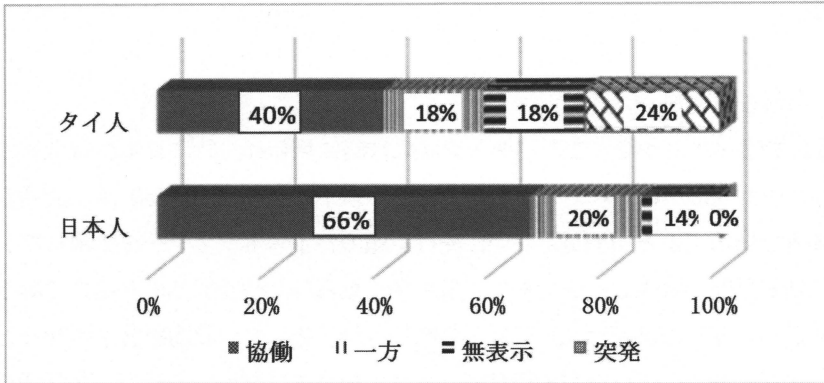


図3を見ると、日本語母語話者とタイ語母語話者の間に見られる話題転換のパターンの相違点が明らかである。日本語会話では会話参加者双方による先行話題を終了させてから新規話題を導入するという「協働的転換」が圧倒的に使用されているが「突発的転換」は一例も見られなかった。それに対して、タイ語会話でも日本語と同様で「協働的転換」が最も多く使用されているが、日本語会話で用いられていない「突発的転換」がその次に多く使用されている。また、「無表示的転換」と「一方的転換」に関しては、日本語とタイ語で差がなく、多少使用されているという結果であった。

^③ 今回のデータで見られた各話題転換パターンの使用実態の回数は次の通りである。日本語母語話者の場合は「協働」が37回(66%)、「一方」が11回(20%)、「無表示」が8回(14%)、「突発」が0回(0%)であるのに対して、タイ語母語話者の場合は「協働」が34回(40%)、「一方」が15回(18%)、「無表示」が15回(18%)、「突発」が20回(24%)である。

次に、話題転換パターンの会話例を挙げながらそれぞれの母語話者の行動を詳しく見ていく。ここでは、先行話題を終了させる時点から新規話題を導入するまでの手続きに注目して相互行為の観点から説明する。

4.2 話題転換の相互行為

ここで日本語とタイ語母語話者の間に共通に見られた「協働的転換」、「一方的転換」、及び「無表示転換」と、相違点である「突発的転換」を順番に述べる。

(1) 「協働的転換」

4.1 で述べたように、このパターンは両言語に見られ、特に日本語は全体の66%と圧倒的に用いられているものである。以下の会話 1 JP-253 は、会話の参加者である J2 と J3 がお互いに先行話題の終了ストラテジーを使用してから、新規話題を導入した例であり、最も多く見られたやり取りのタイプである。{共通の実家} の話題は 61 行目から開始され、そして、話題を終了させるとき、まず、J2 は 114 と 116 行目で「あれまー、こんな近いなんて」と評価を述べてから笑いを発して、J3 も 115 行目でほぼ相手の発話と同時に「近い」と評価を述べている。偶然に二人の実家が近くにあったと知った J2 は 117 行目でさらに「こりゃ、びっくりだー」と語尾を延ばしながら驚きを表明している。それに対して、J3 も同様に 118 行目で「へえー」と語尾を延ばしながら驚き表明の相づちを打っている。最後に、J2 は 119 行目で「ふーん」と相づちを打ち、話題を終了させた。この相づちのやり取りにより、これ以上この話題をお互いに続けようとしていないことが明らかになり、J3 はこのとき「えっ」という話題の方向性を変える感動詞を用いて、{出身校} を新規話題として導入した。

会話 1 JP-253 {共通の実家} ⇒ {出身校}

61	J2	え、横浜のどこなんですか↑?。
62	J3	わたしは『地名』。
63	J2	えっ、ぎくっ。
64	J3	えっ、『地名』ですか?。
65	J2	『地名』。
66	J2	あれまー。
67	J3	『地名』のどこですか?。
68	J2	『地名』の『地名』です。
69	J3	えっ、『地名』。
70	J2	どこ…?。
71	J3	私、今『地名』に住んでる。
72	J2	じゃ、なんで、めちゃくちゃ近い⇨2人で笑い⇨じゃないですか[↓]?。
73	J2	あれまー。
		(省略)
106	J2	へー、これまたなんで引っ越したん、
107	J3	いやー、
108	J2	ですか?。
109	J3	なんか、家が手狭に一、みたいな<笑い>。
110	J2	そうなんすか。
111	J2	うちも実は引っ越すんですよ、2丁目から5丁目へ(へえー)、つい、今度。
112	J3	へえー。
113	J2	うん。
114	J2	あれまー、こんな<近い>⇨{<>},,
115	J3	<近い>⇨{<>}。
116	J2	なんて<笑い>。
117	J2	こりゃ、びっくりだー。
118	J3	へえー。
119	J2	ふーん。
120	J3	えっ、『小学校名』?。

以下の会話 2 TH-VR も日本語とよく似ている内容で、会話参加者が同じ寮に住んでいるというものである。67 行目から {下宿} の話題が開始され、会話参加者である V と R は偶然に同じ寮に住んでいるため、83 行目まで寮に住む経緯についての会話を楽しくしていく。しかし、会話を終了させるとき、V は 84 行目で「なるほど」と、R は 85 行目で「うん」と、単に相づちを打っただけであり、日本語の会話に比べて終了時のやり取りが極めて短い。

会话2 TH-VR {下宿} ⇒ {出身地}

67	R	／沈黙 03／พักอยู่แถวไหนอะ? ／沈黙 03／どこに住んでんの?
68	V	อ้อ, บ้านจริงอยู่ที่『ชื่อเขตพื้นที่』。 แต่ว่าแถวที่หออยู่／少し間／หอ X。 それが、実家は『地域名』にある。けど、けど寮は／少し間／X寮。
69	R	อ้า! อยู่หอ X เหมือนกัน<笑い>。 えっ! 私も X 寮だ<笑い>。
70	V	[驚いた声] อ้าจริงหรือ?<笑い>。 [驚いた声] 本当?<笑い>。
71	R	อยู่ X ไหน? X の何号館?
72	V	อยู่ X สอง, X2 号館。
73	R	U สอง เหมือนกัน<笑い>。 私も 2 号館<笑い>。
74	V	[驚いた声] อ้า [↑] <笑い>。 [驚いた声] あら [↑] <笑い>。
75	R	อยู่ชั้นไหน? 何階?
76	V	ชั้นสาม, 3 階。
77	R	ชั้น.. (สาม?) สอง<笑い>。 (3?) 2 階<笑い>。
78	V	อ้อ, なるほど。
79	R	โ้วๆ โลกกลม<笑い>。 すごい、すごい、地球って狭いよね<笑い>。
80	V	<笑い>อาจจะเดินสวนไปสวนนก。 <笑い>もしかしてすれ違っているかもね。
81	R	อือๆ อยู่ตั้งแต่ปีไหนอะ? ええ。何年生から住んでんの?
82	V	ปีหนึ่งเลยแหละ。ปี<ไหน?> {<} 【。 1 年生からなんだよ。何<年生?> {<} 【。
83	R	<ปีสอง> {>}】 <笑い>。 <2 年生> {>}】 <笑い>。
84	V	อ้อ, なるほど。
85	R	อือ。 うん。
86	V	แล้ว／少し間／บ้านจริงอยู่ที่ไหนหรือ? あの、／少し間／実家はどこ?。

(2) 「一方的転換」

このパターンは、新規話題を導入する者による先行話題を終了させるストラテジーが用いられるが、相手からの終了ストラテジーを待たず、すぐに新規話題を導入するタイプである。日本語では 20%、タイ語では 18%の使用が見られた。会話 3 JP-193 では、多文化国家に興味を持っている JSF02 が 221 行目で「え、ベトナムはどうなんですか?。」とベトナムに留学経験があった JBF02 にベトナムの使用言語について質問している。そこで、JBF02 は 222 と 224 行目で「ベトナムはベトナムですよ」と答えたが、JSF02 は 225 行目で再び質問した。逸れに対し、JBF02 は 227 行目でわざと「だけ」を外来語の「オンリー」に変えて自分の答えを主張した。そこで、{多文化国家}の話題をベトナムで展開するのをあきらめ、228 行目で「オンリーで?>」と相手の発話を繰り返した形で確認要求をした後、229 行目で「あー、そうなんだ」と相づちを打って、この話題を終了させた。(1)「協働的転換」と異なっている点は、ここで先行話題を終了した JSF02 は相手からの終了発話を待たず、すぐに次のターンも奪い、{旅行}という新規話題を導入した点である。

会話 3 JP-193 {多文化国家} ⇒ {旅行}

221	JSF02	え、ベトナムはどうなんですか?。
222	JBF02	ベトナムはベトナム,,
223	JSF02	ベトナム、<だけ>{<}
224	JBF02	<だけ>{>}ですよ。
225	JSF02	え、あの例えば一、フィリピンとかだと英語とかも結構…フィリピンで使われてる英語っていうのも結構注目されてたりとかしてるんですけど=。
226	JSF02	=ベトナム…、に関してはもう本当にベトナム語?。
227	JBF02	ベトナム語<オンリー>{<}
228	JSF02	<オンリーで?>{>}。
229	JSF02	あー、(うん)そうなんだ。
230	JSF02	本当はね、…去年の夏ぐらい、ベトナム行こうっていう話があって、旅行で。

下のタイ語の会話 4 TH-CT も日本語と同じで、15 - 24 行目では、T と C

はそれぞれ本調査に協力した経緯を語り合っていて、25 行目で T が話題のまとめとして「ว่าแบบให้มานั่งคุยแบบนี้ (会話してもらってこと)。」と発話を繰り返して終了させた。それから、相手にターンを渡さず、続いて 26 行目で {留学} という新規話題を導入した。

会話 4 TH-CT {共通体験} ⇒ {留学}

15	T	อ้อ, อาจารย์ก็เคยอาสาแบบ, ช่วยงาน, なるほど。それで先生、お手伝いなんだ。
16	C	ใช่<笑い>。/少し間/แล้วรู้จักอาจารย์ได้ยังไงอะ?。 ええ<笑い>。/少し間/で、どういう関係で先生と知り合った?。
17	T	เพื่อนบอกต่ออะ, เหมือน, ไม่รู้จะ, รู้จัก「ชื่อของเพื่อน T」ไหนอะ?。 友達を通してんだ。あの、えー「T の友達の名前」って知っているかな?。
18	C	「ชื่อของเพื่อน T」?。 「T の友達の名前」?。
19	T	ไม่รู้จะ, =แล้วรู้จักกับอาจารย์, แล้วคำก็เคยบอกว่าแบบ "มาช่วยอาจารย์ได้ไหม?" แล้วก็เคยบอกว่า"โอเคได้ๆ" เนี่ยก็เคยเหมือนแบบ,, 知らないけど。=先生を知ってて。それで「先生を手伝ってくれる?」って言われて、こっちも「いいよ」って答えたら、なんか、
20	C	โอเค<笑い>。 なるほど<笑い>。
21	T	ก็เคยเหมือนแบบมาช่วยอาจารย์อย่างนี้, ก็แบบตอนแรกก็บอกว่า"เออมานั่งคุย" , เราก็"เออนั่งคุย", แล้วคุยอะไร?, (นั่งคุย<笑い>) อะไรนี่, なんか手伝いに来たって感じ。最初はただ「会話してもらおう」って言われて、こっちも「はい、会話ですね」って思ったけど、一体何を話せばいいか?、(会話<笑い>) ちょっとなんだろうって思った。
22	C	ก็เพิ่งรู้เหมือนกันว่านั่งคุย, =คือเหมือนกับรู้จักอาจารย์, อาจารย์ก็"มาช่วยทำงานวิจัยหน่อย", ก็"โอเคๆ"อะไรนี่, 私も「会話」ってことを知ったばかり。=実は先生を知ってて。それで、先生が「手伝いに来て」って、ほんで、「はいはい」って感じ。
23	T	อ้อ, คือแค่แบบ, ก็รู้แค่เหมือนกันใช่ปะ?。 なるほど。なんか知ってることは一緒だよな?。
24	C	ใช่ๆ うんうん。
25	T	<u>ว่าแบบให้มานั่งคุยแบบนี้</u> 。 会話してもらってこと。
26	T	แล้วไปแลกเปลี่ยนที่เมืองไหนอะ?。 えっと、どこに留学してきたの?。

先行話題を終了させる人物が、引き続いて次の話題を導入するというパターンで、発話の順番が同じように見えるが、新規話題を選択する行動に違いがある。日本語の場合は会話 3 JP193 のように 230 行目の新規話題は先行話題の内容の一部から展開されたものであるのに対して、タイ語の場合は会話 4 TH-CT のように先行話題の内容と全然関係ないものが導入される例も少なくないのである。

(3) 「無表示転換」

このパターンは、会話の相手からの終了ストラテジーが見られるが、新規話題を導入する者が終了ストラテジーを用いず、新話題を導入するタイプである。日本語では 18% の使用であるのに対して、タイ語は 14% であったが、そのときの行動に違いがさほど見られないため、タイ語の例のみを挙げることにしたい。以下の会話 5 TH-MR では、{通学} の話題を導入した B は、話題を終了させるとき、126 行目で「อ้ออ้อใช่。อย่างนั้นก็ดี (ああ、確かに。それもいいね)」と理解と評価をした後、「อ้อแต่ถึงรัฐศาสตร์โดยอะนะะะ. นึกว่าถ้าแบบถึงจากอักษรนี่ก็เดินมาก็ 15 นาที, 20 นาที. (直接「M の学部」まで行けるよね。なんか「B の学部」まで歩いて 15 分、20 分ってとこ。)」と最後にまとめとして確認し、自分の学部までの道と比較して意見を追加したが、M は何も終了の相づちなどを打たず、127 行目ですぐにターンをとって {旅行} という新規話題を導入したのである。

会話 5 TH-MR {通学} ⇒ {旅行}

122	B	แล้วอย่างนั้นก็ต้องกะลาออกก็ไม่งอะ? じゃ、どのぐらい余裕を持って出かけなければならないの?
123	M	ก็อ้อ—ต้องกะเวลาประมาณชั่วโมงครึ่งเฉยะ. (อ้อ) = เพราะว่า, เพราะว่าเผื่อรถลม (อ้ออ้อ) แอร์พอร์ตลิงค์ก็ยังอ้อ. = แล้วสมมติว่าแอร์พอร์ตลิงค์เค้าเค้าบางทีเค้าไม่ได้มาบ่อยเหมือน BTS จะใช้อย่างนั้น. (อ้ออ้อ) = เราก็ต้องแบบไปรอก่อนนี่. あ、あの—1 時間半も余裕を持ってでかけるの。(へー) = なん、なんかときには—(うん) エアポートリンク (空港線) に乗り換えることもあるから。= エアポートリンクは BTS みたいに本数がないから。(ああ) = それで、早めに行って駅で待たなければならぬんだ。

124 B	<p>อ้ออ้อใช่. แต่ไม่จั้น-ก็คือต้องแอร์พอร์ตลิงค์มาก-แล้วเสร็จแล้วก็ต้องBTSต่ออีกสองสถานี (อ้อใช่) ปะ? แล้วก็เดิน.</p> <p>あ、そうだね。そうしたらエアポートリンクできてーBTS に乗り換えてあと2駅乗ってくるでしょ (ええ) ?で、徒歩。</p>
125 M	<p>เฮ้ ! ที่จริงอาจจะแอร์พอร์ตลิงค์มากแล้วก็ขึ้นรถเมล์มาหน้า 『มหาวิทยาลัยของ M』 ก็ได้. =มันมี- (อ้อ. เอะเนอะๆ) หรือไม่ก็อาจจะBTSมากแล้วก็ขึ้นรถป้ออะไรอย่างเงี้ย, มีหลายทางมาก. (หืม) แต่ว่าที่นี้รถป้ออาจจะรอนานเราก็ขึ้นรถเมล์เลย=.</p> <p>いや! エアポートリンクで来て、バスに乗り換えて『Mの大学名』のまえで降りることもできるよ。=実は- (あ、本当だ) BTS で来て、それから学内バスに乗り換えることもできる、いろんな方法がある。(うーん) ただし、学内バスはちょっと待たなきゃいけないから、=それで、バスに乗っちゃうんだ。</p>
126 B	<p>อ้ออ้อใช่. อย่างนั้นก็ดี. =อ้อแต่ถึง 『Mの学部』 เลยอะนะ. นึกว่าถ้าแบบถึงจาก 『Bの学部』 ไรสี่ยก็ [咳をした] เดินมาก็15 นาที, 20 นาที.</p> <p>ああ、確かに。それもいいね。=直接『Mの学部』まで行けるよね。なんか『Bの学部』まで [咳をした] 歩いて15分、20分ってとこ。</p>
127 M	<p>แล้ว, อันนี้เคย/少し間/เค้าเรียกว่าไหน? =ส่วนส่วนใหญ่ช่วงปีใหม่มันก็จะมีแบบว่าท่องเที่ยวอะไรเที่ยว (อ้อ) อย่างนี้แหละ. แบบว่าช่วงปีใหม่หรือปิดเทอม # # ไปเที่ยวอะไรแบบนี้?</p> <p>で、あの/少し間/なんっていうのかな? =大体(03)お正月あたりなんかよくりょー旅行 (うん) するのよね。なんかお正月 # #、または学期休み # # どちらか旅行にいかない?</p>

(4) 「突発的轉換」

このパターンは、会話参加者双方から終了ストラテジーがないまま、新規話題が導入されるタイプである。今回のデータでは日本語母語話者による使用が一例もないが、タイ語母語話者のデータでは、24%も用いられている。以下の会話 6 TH-PN では、英語の授業のグループ分けについて話しているとき、N は 181 行目で前の P の発話に答えたにもかかわらず、P は英語の先生のこと気がなっているのか、先行の話題がまだ終了していないのに、突然新規話題を導入したのである。それに対して、N も驚かず、183 行目で次のターンで会話を続けている。

会話6 TH-PN {授業} ⇒ {共通の知人}

175	N	โหด, ปีที่แล้วคือที่เราเลือกเรียนปีที่แล้วเพราะเรากลัวรุ่นน้องนั้นแหละ。 = เราก็เลยกลัวว่าแบบ, อย่าไม่กว่าเพื่อนไม่เป็นไร, ดีกว่า<ไปไม่กว่ารุ่นน้องโหดนี่, > こわい。去年一去年履修した理由も後輩が怖いからなんだ。 = なんか、友達より能力が低くてもいいけど、<後輩より能力が低いこと>よりました。	
176	P	<ไม่กว่ารุ่นน้องโหด? > (อ๋อ) ของเรามันแบบไม่รู้ว่าจะโหดอะไรนะ, แล้วคือเวลาเราลงเราต้องหาเพื่อนคนเดียวกันลง, ก็เลยโหด, เพราะว่าถามมันไม่ได้ด้วย, <後輩より能力が低いことでしょうか? > (うん) 私一私の場合は何年生の授業かが分からないけど、履修するとき、同じ学部の友達と一緒に受けるの。それで、問題ないんだ。履修できる授業時間もそうあるわけじゃないし。	
177	N	อืม, うん。	
178	P	ก็รู้สึกว่าการน้องแบบไม่ค่อยเก่งเท่าแบบปีสามอะเรารู้สึกว่าการน้องปีนั้นไม่ค่อย, (เทอะ?) ไม่รู้จะทำไม่เหมือนกัน, 私も後輩今年の後輩は今の三年生みたいにあまり能力が高くない気がする (本当?) なんか分からないけど。	
179	N	เราไม่รู้ไม่เคยเรียนกับน้องเลย, ไม่กล้ากลับไม่เรียน<笑い>กล้า, 私は全然知らない。後輩と一緒に授業を受けたことがないから。また戻って受ける勇気もなくて<笑い>こわいから。	
180	P	แบบอาจจะเพราะว่าคนเก่งอยู่เขตอื่นปะ? でも、なんかよくできる子が他のグループにいるから?。	
181	N	อาใช่, อาจจะเป็นไม่ได้, คือแบบมัน พวกเอก-Eng ชอบลือคชชอะ, มันก็จะกระจายคนนี่, เค้าก็จะไปลือคชช, まあ、それもそうかも。なんか一英語専攻のグループ分けがよく決まっているから、んで、例の先生のクラスに飛ばされるのだ。グループが決まっているから。	
182	P	แต่เราว่า『ชื่อครูสอนภาษาอังกฤษ』แบบนำป๋อ<笑い>。 でも、『英語の先生の名前』ってつまらない<笑い>。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 相手からの返事を持たず </div>
183	N	ตอนปีที่แล้วคือเราค้าเพิ่งเข้ามาอะ, เหมือนแบบเค้าก็แบบพยายามให้ดิสคัสกันให้หน่อยอย่างนี้แหละ, จนแบบเราก็ก๊แบบอ๊อ, (อืม) คือแบบแล้วเค้าก็แบบถามพยายามจะให้พูดแต่เราไม่มีอะไรจะพูดแล้ว<笑い>。 私を教えたとき、彼女はまだ入ってきたばかりだ。なんか一所懸命クラスでみんなで議論ばかりさせてた。それももううんざりするほどにね。(うん) で、先生も、もっと意見を述べるように促したけど、私にはもう言いたいことが何ないんだ<笑い>。	

さらに、以下の会話7 TH-TP は今回のデータの中で見られるタイ語母語話者によりよく用いられるやり取りのタイプである。会話7では {留学} の話題

の後半に P が 256 行目で日本に留学している親戚の情報を共有して、266 行目で「อ่าวจริงหรือ? เป็นสำเนียงหรือ? อ่อนกว่าเป็น.. 本当? (大阪は) イントネーションなの? 最初はなんか。」と T に質問したにもかかわらず、T からの返事を待たず、さらに、自分も言いかけたまま〔試験〕の新規話題を導入したのである。

会話 7 TH-TP {留学} ⇒ {試験}

256	P	ตอนเนี้ยแบบเนี้ยก็มีญาติอยู่ญี่ปุ่นเหมือนกัน. เจ้าแบบ, เจ้าได้ทุน. แต่เค้าอยู่ [ชื่อมหาวิทยาลัย]. (อิม) แล้วแบบได้ทุนไปญี่ปุ่น. 今なんか一親戚も日本にいる。あの人はなんか一奨学金もらっているみたいだけど『大学名』で勉強している。(うん) それで、日本に留学できた。
257	T	เร็ด. すごい.
258	P	เออแล้วแบบไปอยู่นานมาก. เนี้ยอยู่ได้ปีนึงมั้ง.. เออแล้วก็แบบตอนแรกพูดญี่ปุ่นไม่ได้เลยเพราะแบบ.. เจ้าก็เรียน [BBA] เนี้ยแหละแต่อยู่ [ชื่อมหาวิทยาลัย] แต่แบบเหมือนไม่ได้ทุนแล้วก็เลยแบบต้องพูดภาษาญี่ปุ่นอะไรเนี้ย. แต่ก็เจ้าก็แบบอยู่โอซาก้า.. しかも、もう長くいるよ。いまーもう 1 年あったかな。最初は日本語まったく話せなかった、なんか。あの人は「BBA」で勉強している、『大学名』のほうだ。でも、奨学金に受かったから、日本語を使わなければならぬ。今彼女もおおさかーに住んでいるんだ。
259	T	โอซาก้า.. おおさかー.
260	P	เอ. จะไปหาเค้า. ええ。会いに行くけど。
261	T	ได้ภาษาคันไย. [나머りのタイ語の発音で] 関西弁になると思う。
262	P	อะไรละ? えっ、なに?
263	T	ได้ภาษาคันไยกลับมแนเคย. [나머りのタイ語の発音で] 絶対関西弁になって帰って来るね。
264	P	ทำไมอะ? มันคืออะไรหอออะ? なんで? それって何ですか?。
265	T	แบบ/少し間/อิมก็เป็นภาษาหน่อของเค้าอะ. なんか/少し間/なまりのある方言のこと。
266	P	อ่าวจริงหรือ? (อยู่โอซาก้า) เป็นสำเนียงหรือ? อ่อนกว่าเป็น.. 本当? (大阪は) イントネーションなの? 最初はなんか..,
267	P	เน, เนเขียนอะไรละ?, เค้าอะไรละตัวที่มีนัยกๆ, คันลิปะะ? ね、書く、何だっけ?、難しいもの、漢字?

相手からの返事を待たず+言いかけたまま...

試験

5. 考察

今回の結果は楊（2005）の結果と同様、日本語母語話者によるこの「協働的転換」パターンの使用割合が圧倒的多く、大半を示しており、タイ語母語話者もほぼ同様の言語行動をとっているといえる。すなわち、会話参加者双方により先行話題を終了させてから、新しい話題を導入する「協働的転換」が最も好まれているようである。このように初めて会った人に気を配りながら話題を変えるという行動は今回の対象者である日本語母語話者グループにもタイ語母語話者グループにも共通しているといえる。しかし、同じパターンを使用するといっても転換の際のやり取りが若干異なっていることが分かった。

タイ語の会話に比べると、日本語の会話の多くは先行話題を終了させるまで何回か終了ストラテジーが繰り返され、やり取りが比較的長く続いていることが明らかになった。これは、日本語とタイ語の会話スタイルが根本的に違っていることに起因しているのではないかと考えられる。つまり、日本語の話の一般的な順序が「質問→答え→相づち」であるのに対して、タイ語の順序は「質問→答え」のみになっているという現象が見られたということである。そのため、相手が自分の知りたいことさえ得られれば、その会話自体が成立する。一方、日本語の会話は、質問に答えてくれた相手にさらに、理解の相づちなどを打たなければならないという特徴がある。これは八代・世良（2010）も述べているように「日本語はあいづちや、会話の中でのやり取りが多いことが特徴である」ということを表している（八代・世良 2010: 49）。

また、今回のデータで見られた話題終了・開始の際に使用されたストラテジーには、次のようなものが見られた。

<日本語>

終了ストラテジー:

感情表明（へえ、うそ、いいなー）、相づち（ふーん、うん、そうそう、そっか、なるほど、そうなんだ、あ、ほんと、はいはいはい）、評価（かわいそう、おもしろそう、楽しそう）、同意（ねー、ですよ）、繰り返し、まとめ、及び非言語行動（笑と沈黙）

開始ストラテジー:

接続表現 (でも、それで)、感動詞 (えっ、あ、なんか、そう)、言いよどみ (あの、えーと、えー) 評価、確認要求 (～よね)

<タイ語>

終了ストラテジー:

感情表明 (ตายละ)、相づち (อืม อ้อ โอ ไอล)、評価 (ดีจังเลย)、繰り返し、返し、及び非言語 (笑いと沈黙)

開始ストラテジー:

接続表現 (แล้ว)、言いよどみ (พอ อ้า)

以上のように豊富な表現がある日本語は会話のやり取りにも影響を与えていることが考えられ、相手のあらゆる発話に対して何度か相づちが打たれている日本語には話題終了・開始のストラテジーが豊富なのではないだろうか。

今回の分析結果の中で最も大きな違いとしてあげられる点は、タイ語母語話者に2番目に多く見られた「突発的転換」パターンの使用である。今回見られたタイ語母語話者の発話行動では、会話中に相手からターンを奪い、そのとき思いついたことを話したり、話がまだ終了していないのに、勝手に終了させたり、相手の質問に答えないうまま新しい話題を導入したりするというものが見られた。日本語母語話者から見ると、不愉快などを招きかねないが、その会話の続きを観察した限り、タイ語母語話者には特に不愉快を表す様子は見られず、ほとんどの会話がスムーズに楽しく続けられていた。

このような現象が起きた理由として、タイ語母語話者である対象者は、今話されている内容より、初対面の「場」を重視し、なるべく間がないように次々と話題を投げ込もうとしていることが考えられる。フォローアップインタビューでも「初対面の人と話すとき、なるべく沈黙が発生しないようにいつも心掛けている」と意見を述べた協力者が何人かいた。親しい人であれば、疲れたり、話したくなくなったりしたとき、しばらく何も話さなくてもいいが、本調査のように、初対面の人に対しては、沈黙が起きると相手に失礼なのではないかと

思い、会話が途切れないよう懸命に話題を探そうとした結果、話されている内容に十分配慮できなくなったと考えられる。

このように、異なる文化の人同士が接触するとき、このような文化的違いがあることを意識しながら会話をする、相手に戸惑うことなくよりスムーズに会話が進められるだろう。

話題転換のパターンは、会話参加者の年齢、性別、及び会話を交わす場所などの要因が変われば、結果が変わる可能性もあるだろう。そのため、今後は異性同士や違う年齢層の対象者同士などの会話データを収集し、今回の結果との相違点及びそれぞれのグループの会話の特徴を見出す作業を行っていきたい。

<参考文献>

奥山洋子（2000）「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話—質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に—」『日本学報』韓国日本学会、45号、pp.117-132

陳文敏（2003）「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』国立国語研究所、14号、pp.7-28

中井陽子（2003）「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』早稲田大学日本語研究教育センター、16号、pp.71-95

三牧陽子（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」『日本語教育』日本語教育学会、103号、pp.49-58

村上恵・熊取谷哲夫（1995）「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』表現学会、62号、pp.101-111

八代京子・世良時子（2010）『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』三修社

楊虹（2005）「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本言語文化学会、30

号、pp.31-40

- West, C. & Garci & A. (1988) Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men, *Social Problems*, Vol. 35, pp. 551-573
- Yuphawan Sopitvutiwong. (2016) “Comparison of Schema and Strategies of Topic Selection between Thai and Japanese People for the Conversation with People Met for the First Time”. *Warasan Aksornsaat*, Pee thee 45 Chabab thee 1 (チュラーロンコーン大学文学部紀要、第 45 年部 1 号、2016) (Printing)

コーパス

- 宇佐美まゆみ監修 (2011) 「BTSJ による日本語話し言葉コーパス (2011 年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 B (課題番号 20320072) 研究成果

謝辞： 本研究を行うにあたり、Kanokwan Laohaburanakit Katagiri 先生からご指導いただきました。ここに深く感謝の意を表します。

This study was supported by The Grant for Development of New Faculty Staff (GDNS 58-024-22-004), Ratchadaphiseksomphot Endowment Fund, Chulalongkorn University

中島敦『李陵』における「自己」と「他者」の問題
—典拠との比較をとおして—

“Self” and “Other” in Atsushi Nakajima’s Literary Work: *Liling* by
Comparison with the Chinese Original Texts

彭 雨新⁽¹⁾

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 M2

要旨

本稿は、中島敦の短編小説『李陵』と中国の原典における李陵に関する記載との比較により、中島の李陵像とその悲劇性を明らかにする。まず、中国原典との比較をとおして、今までの典拠比較研究では指摘されていなかった6箇所を書き換えを新しく指摘し、考察を深めている。そこから、中島の李陵像における「自己」と「他者」の問題が浮かび上がる。この6箇所を書き換えを考察した結果、中島の李陵の自己認識は自ら形成できず、他者の存在、他者からの評価が李陵の意識の中で過剰に拡大されている。すなわち、中島の李陵は一種の自意識過剰だと言える。李陵の悲劇性の根源も、従来言われるような「運命の悪意」ではなく、彼自身の自意識過剰にある。

キーワード：中島敦、李陵、自意識過剰

Abstract

Atsushi Nakajima’s literary work: *Liling* is based on a real life story of Li Ling, a general of Chinese Han Dynasties. Since the preceding research is insufficient, this article compares the details of Atsushi’s short story with the original texts in China, and analyses the character of Atsushi’s Li Ling. It turns out that Li Ling, protagonist of Atsushi’s work, has 6 aspects that are different from the original, which have not been pointed out before. And, this comparison sheds light on the theme between “Self” and “Other” in Atsushi’s work, which is different from the well-known theme “the malice of destiny”. It becomes clear that Atsushi’s Li Ling cannot build his self-awareness, because of the deep feeling that he is always being

(1) e-mail: pengyuxin2012@hotmail.com

watched and judged by others. And the self-consciousness of Atsushi's Li Ling makes his life a misery.

Keywords : Atsushi Nakajima, Li Ling, Self-consciousness

1. はじめに

近代日本文学の中には、中国古典や中国史を題材とした作品が多く見られる。このような日本の中国歴史小説には、日本人作家の中国古典の受容や、中国史への独特の見解などが反映されている。中国古典を題材として創作する日本人作家の中で代表的な一人は中島敦である。中島は『山月記』(1942)をはじめ、『名人伝』(1942)、『弟子』(1943)などの中国古典を題材とした作品を数多く創作し、その漢文調の格調高い文体と近代人としての思考が後世に高く評価されている。

本稿で注目するのは、中国古典史書『漢書』『史記』等を題材とした中島敦の代表作『李陵』(1943)である。この作品にとりわけ注目する理由は、中島敦が『李陵』を創作する以前、李陵という人物は、日本であまり知られていなかったからである。中島の『李陵』は初めて「李陵」を中心に^②、その生涯及び関連する歴史的事件を日本文学の題材として用い、日本に紹介した作品として、重大な意義を持っているのである。本稿の目的は、中島敦『李陵』と、中島が資料として使用した中国古典との比較文学的研究をとおして、小説における「自己」と「他者」の問題に注目し、中島敦の李陵像とその悲劇性を明らかにすることである。

2. 先行研究

中島敦の『李陵』に関する先行研究を概観すると、主に三つに分類できる。一つ目は、中島が創作の際に参考にした中国の古典史書、詩集、地図などの典拠への考証、及び中島の書き換えについての典拠比較研究である。二つ目は、

^② 李陵関連の歴史的事件における蘇武、司馬遷、漢の武帝などの人物については、中島の前にも詩歌、歴史書や絵画作品などの創作がある。

作品の構造や主人公の認定、そしてテキストの読みの問題などをめぐる研究である。三つ目は、李陵の悲劇性や作品に含まれる中国思想など、作品解釈的な研究であり、これらは多く見られる。そのほかに、時代背景と結びつけ、戦時下の日本、植民地問題や帝国主義などを論じる研究も散見される。本稿では、典拠比較研究を中心に説明を行う。

『李陵』に関する典拠比較研究は1970年代から行われている。そのうち代表的なものは、佐々木(1976)と村田(1995)である。具体的にいえば、佐々木(1976)は主に中島が多く使った典拠である『漢書』との比較であり、他の典拠の『史記』『文選』にも触れている。小説全三章をAからMの13段に分けて詳細に考察し、作品と素材との関係を「第一に素材をそのまま作品の一部にしている場合」、「第二に素材を骨子にしながら細部の省略、又は加筆が見られる場合」、「第三に素材を全く逆の意味内容の記述に変えて用いている場合」、「第四に素材がなく作者のイマージネーションによって書かれた場合」と、四つの場合に分けている。この分類に基づき、とりわけ第三、第四の場合を分析し、中島の意図を考察する。佐々木(1976)は『李陵』の典拠比較研究における先駆的な研究であり、多くの研究で踏襲されている。しかし、いくつかの誤謬があるうえ、主要人物の李陵をめぐる考察にとどまっているため、他の人物、とりわけ非主要人物をめぐる書き換えについての考察は十分ではない箇所が見られる。

また、村田(1995)は佐々木(1976)を踏襲した上で、新しく発見した中島が『李陵』の作成時期に書いた草稿、断片、李陵年表、及び使用していた地図等の資料を用いて典拠比較研究を行っている。例えば、中島の蔵書である『續國譯漢文大成文學部第十九卷高青邱詩集第一卷』(久保天髓譯解 国民文庫刊行会 昭和5年1月20日)『高青邱詩醇一、二、三』(三冊)(斎藤拙堂選 青木嵩山堂)との比較により、小説における漠北の叙景描写などの細部描写の出処と、中島の高青邱受容が明らかになっている。ほかに、中島(1997)、李(2001)、渡辺(2006)、閻(2006)、夏(2012)などにも典拠比較の部分が見られ、先人の研究ではあまり言及されていなかったマイナーな人物に注目している。

3. 中国原典の概況

先行研究の典拠比較には不十分な箇所が見られるので、本稿では改めて典拠比較の基本作業を丁寧に行う必要があると考える。中島敦が『李陵』執筆の際に参照した原典とその使用頻度を整理すると、表1ようになる。

表1 中島敦『李陵』の典拠

典 拠	重要度・使用頻度
『漢書』：「李廣蘇建伝」「司馬遷伝」「匈奴伝」等 『文選』（昭明文選）：「報任少卿書」「答蘇武書」	主として使われている資料
『史記』：「李將軍列伝」「太史公自序」「匈奴列伝」	副次的に使われている資料
『續國譯漢文大成文學部第十九卷高青邱詩集第一卷』、『高青邱詩醇一、二、三』、『論語』等	細部描写・言及のみの資料

まず、典拠の中で最も多く使われている資料は『漢書』であり、特に第五十四巻の「李廣蘇建伝」である。「李廣蘇建伝」はその前半と後半で中心人物が異なり、それぞれ李廣から孫の李陵、蘇建から子の蘇武について叙述され、『李陵』にはそれを基にしたものが多く見られる。村田(1995)によれば、中島が『李陵』中で実際に使用していたテキストは「四部叢刊 百衲本二十四史『史記』・『漢書』」である^③。

次に、南北朝時代の詩文集『文選』（昭明文選）の巻四十一・書上における「報任少卿書(任少卿ニ報ズル書)」と「答蘇武書(蘇武ニ答フル書)」という二編も主要資料として参照されていたと思われる。「報任少卿書」は司馬遷から友人の任安に宛てた手紙で、「答蘇武書」は李陵から蘇武に宛てた手紙であり、史書ではないが、当事者の視点から事件と感想を語る点としては価値がある^④。

また、司馬遷の『史記』も副次的な資料として使用されている。例えば、「李將軍列伝」、「匈奴列伝」等の参照が見られる。最後に、言及のみの資料として、前述の村田(1995)は明代詩人高青邱(高啓)の詩集からの参照を詳細に考察し、それ以外には、『論語』に由来した「述而不作」等も挙げている。

③ 村田(1995) p. 3.

④ 「答蘇武書」は李陵ではなく他人の偽作だという考えが優勢である。

4. 中国原典との比較

従来の典拠比較研究では、運命の悪意に翻弄される李陵の悲劇性を検討しているものもあるが、本稿では、運命論とは異なり、人物自身の行動や意識に注目し、他の側面から李陵像を検討したい。

第2章にも触れているように、最も定評のある典拠比較研究は佐々木(1976)である。佐々木氏の指摘として、たとえば、典拠における李陵の「遂降ル」が、小説の中では「突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰って失神した」と変更されている箇所があり、李陵像の正当化における最も重要なところとされている。つまり、中島は李陵の敗北を「自らの投降」から「失神して捕らえられた」というように書き換えたのである。また、小説の第一章における両軍交戦の場面や、主要人物の心理・性格描写は、典拠がなく完全に中島の創作だと指摘されている。しかし、李陵に関する細部描写、及び他の人物に関する書き換えについての言及は、まだ十分ではない箇所が見られる。また、佐々木氏が使用した典拠のテキストは『漢書評林』（李陵伝・蘇武伝・司馬遷伝）などで⁶⁾、典拠の原文ではないため、本稿では関連部分はすべて典拠の原文を参照し、中島の書き換えについてさらに詳細に考察する。

4.1 李陵についての書き換え

まず、中島が素材から変更、或いは完全に創作している「李陵の細部」について、今まで指摘されていなかった四箇所を本節では提示する。

一箇所目は、小説の第一章における李陵の「武帝の詰問」に対する反応と、「軍吏による趙破奴の話」に対する反応に注目したい。

「武帝の詰問」というのは、正式に匈奴軍と戦う前、李陵の後陣になることを恥とする老将の路博徳が、李陵にとって不利な上書を武帝に出し、その上書で怒っている武帝が、李陵への詔書の中で李陵を詰問している場面のことである。中島の小説では、武帝の詰問について、「博徳と相談してのあの上書は

⁶⁾ 佐々木(1976) p. 108.

一体何たることぞ、という烈しい詰問のあつたことは言ふ迄も無い」⁶⁾と一言しか書かれていない上、その後、李陵はこの詰問に対して何の反応もみせず、そのまま行軍の状況へと続いていく。しかし、典拠の「李廣蘇建伝」には以下のように書かれている。

「(前略)所與博多言者雲何?具以書對。」陵於是將其步卒五千人出居延,北行三十日,至浚稽山止營,舉圖所過山川地形,使麾下騎陳步樂還以聞。

(p. 2451)

路博徳と談ろうたことは、何ごとじゃ。委細、書面にて返答せい。陵はここで歩兵五千人を率い、居延を出、北の方へ三十日行軍して浚稽山に到着、ここで宿営した。経過した山川地形を、ことごとく地図にして、麾下の騎兵陳歩樂に持たせ、帰って上奏させた。 (日本語訳は本田(1968: 6)を参照)

武帝から李陵に「書面にて返答せい」という命令が確かにあり、李陵がそれを無視したり違反したりすることは考えられないので、後文の陳歩樂に上奏させたものの中で、武帝の詰問に対する返事も必ず含めているはずである。ゆえに、この場面に対して、中島は武帝の命令を省略することで詰問の部分をぼやかし、さらにそれに対する李陵の反応についても描かないことで、李陵が武帝の詰問に対して無回答であることを読み手に暗示している。

人臣が君主の詰問を無視することは、古代中国の君臣道では非常識なことであり、中島もそれを十分理解していたと思われる。その点から、このようにぼやかしたり、暗示の意味を含ませたりするのは、非常に不自然とも言える。よって、この箇所は物語の展開、あるいは李陵像の造形のために、わざと書き換えたのではないかと考えられる。

⁶⁾『李陵』『中島敦全集』1, p. 487. 以下全集からの引用は、漢字及び繰り返し記号を適宜現行のものに改める。

まず、物語の展開という側面から考えると、第三章における李陵の漢にいる家族の「族滅の誤解」が想起される。なぜ、公孫敖の一言で、しかも「李將軍」という曖昧な言い方で、武帝はすぐに李陵の裏切りだと信じ込んだのか。以前から、武帝は李陵に憤怒と不信を抱いていたのではないかと考えられる。路博徳の上奏文を読んで「酷く怒った」武帝の「激しい詰問」に、特に返答しなかった李陵は、正に孫子の言う「將在軍、君命有所不受」（「將、軍に在りては君命も受けざるところあり」）⁷⁾である。したがって、李陵のような遠い戦場に出ている将軍が、武帝の命令に少しでも怠慢な対応をすれば、武帝の大きな憤怒と懷疑を招くことになるのは言うまでもない。武帝の李陵に対する不信は、すでにこの時点から種が蒔かれ、後のあまりにも軽率な理由でも、李陵の漢の家族が全員処刑され、李陵の人生も徹底的に転覆されたのである。

では、なぜ李陵は武帝の詰問に返答しないという無謀な行為をしたのか、次に、李陵の造形という側面から考える。李陵は地味だが平穩な「輜重の役」が「あまりに情けない」と思い、無理やり出撃部隊の役を請い、あえて前途多難な道を自ら選んだ。自分は「飛將軍と呼ばれた名将李廣の孫」であるという誇りを持っているほかに、自分自身の「騎射」などの軍事的才能に対する傲慢な考えが潜んでいるのではないかと考えられる。戦場に出たからの行軍や戦闘に対する詳しい描写から、李陵が確かに軍事的才能を持ち備えており、匈奴との戦いに集中していたことが読み取れる。しかし、協力者であるはずの老将路博徳や、部下の管敢など身近な人物との関係についての描写があまり見られない。軍に潜んでいる女性たちを見つけたときも、「李陵は軍吏に女らを斬るべくカンタンに命じた。彼女らを伴い来たった士卒については一言のふれるところもない」（p. 491）とされている。すなわち、李陵という人物は、最も権威のある君主の武帝から、最下層の軍に潜んでいる女性までも含む、周囲の人々との関係に淡白で、冷たく対応処理する傾向が見られる。

⁷⁾『史記』卷六十五「孫子呉起列伝 第五」による。原文は「孫子曰、臣既已受命為將、將在軍、君命有所不受」である。後、司馬光『資治通鑑』には「將在外、君命有所不受」という似通う記述もある。

次に注目するのは、「軍吏による趙破奴の話」に対する李陵の反応である。匈奴との戦いで李陵は窮地に追い込まれ、李陵単独での単于刺殺も失敗に終わったので、残っている兵士を逃がしてやろうと思っているところである。小説の関連部分は以下のとおりである。

やゝあつて軍吏の一人が口を切り、先年浞野侯趙破奴が胡軍のために生擒られ、数年後に漢に亡げ帰つた時も、武帝は之を罰しなかつたことを語つた。この例から考へても、寡兵を以て、かく迄匈奴を震駭させた李陵であつてみれば、たとへ都へ逃れ帰つても、天子は之を遇する途を知り給ふであらうといふのである。李陵はそれを遮つて言ふ。陵一個のことは暫く措け。 (p. 494)

ここまでは、小説と原典の『漢書』とはほぼ同内容であるが、下線部における李陵の返事の台詞に違いが見られる。原典における李陵の返答は、「陵曰：『公止！吾不死，非壯士也』」（「陵曰く：やめい。わしは死なないと、壯士とは言われぬ」日本語訳は筆者による）である。この箇所ですべて注目すべき点は、原典における「生死」の問題が、中島の書き換えにより「陵一個」、つまり、李陵「個人」と軍全体と言う「集団」、つまり「自己と他者」の問題に変わっている点である。また、特に注意しなければならないのは、小説における李陵の自分が「一個」という意識が、この箇所以外に、匈奴に捕らわれ、漢の家族が武帝に処刑された後、再び言及されていることである。

それに現在の李陵は、他人の不幸を実感するには、余りに自分一個の苦しみと闘ふのに懸命であつた。(p. 514)

この時の李陵は、小説の前半にみられた「自分一個」のことより集団や他者の利益を優先に考える人物から、自己を強く意識し、自分自身の感情や気持ちを最優先する人物に変化してきている。したがって、「軍吏による趙破奴の

話に対する李陵の返事」についての書き換えは、意識的に李陵の「自己」という大きな問題を前面に持ち出し、小説の前半と後半における李陵の自己意識の変化を作り出すためだと考えられる。

また、第一章から第三章に目を移し、李陵が匈奴に捕らわれた後の二カ所の書き換えについて二点言及したい。一つ目は、李陵が自分より先に匈奴に投降した漢将李緒を殺すところである。二つ目は、李陵が完全に漢に戻ることをあきらめ、匈奴で余生を過ごそうと思った後、漢への戦争に参加したかどうかというところである。

李陵が李緒を殺そうと思ったのは、周知のとおり「李陵が匈奴軍の兵を練る」(実は李緒)ことを巡る誤解からである。この箇所における中島の書き換えについて、すでに注目されてきた点は、史書には「李陵教单于為兵以備漢軍(p. 2457)」(「李陵は单于に兵法を教えて、漢軍に備えておりますそうな」日本語訳は本田(1968: 8)参照)と、李陵の名が明確に書かれているが、小説では「李陵」を「李將軍」と書き、李緒とも読み取れる言い方に変えて、武帝の誤解を生み、漢で李陵の家族が処刑される原因になっている、という部分である。しかし、李陵が族滅の情報を知った後、その憤怒から自ら李緒を殺したか、あるいは人を遣わせて李緒を殺したかという点でも、小説と原典との間に、相違が見られる。「李廣蘇建伝」には「陵痛其家以李緒而誅，使人刺殺緒(p. 2475)」(「李陵は自分の家族が李緒のために死罪になったことを痛ましく思い、人を使って李緒を刺し殺した」本田(1968: 9)参照)と書かれているが、小説では「その晩、彼は单身李緒の帳幕へと赴いた。一言も言はぬ、一言も言はせぬ。唯の一刺しで李緒は斃れた(p. 512)」という書き換えが見られる。佐々木(1976)はこの書き換えについて「このあたり作者は、素材をそのまま使うことをせず、李陵の驚きと怒りを表現する目的で、素材を誇張した形に創作化している」³⁸⁾と述べているが、それはただの誇張ではなく、中島が作った李陵の性格に相応しい行動に変更したものだと思われる。

原典における記述からは、李緒殺害に関する二つの情報が読み取れる。一

⑧ 佐々木 (1976) p. 343.

つ目は、「人を使って李緒を刺し殺した」ことから、李陵に仕える人がいることが分かる。匈奴に生け捕られた李陵は、一捕虜であり従者はいないはずだが、李陵の命令を聞き、単于の母である大閼氏と親密な李緒を殺しに行く人がいるということは、李陵がすでに投降し、単于から使いを務める者をもらったのではないかと推測できる。二つ目は、原典における李陵が、自ら手を下さず、「人を使って」殺害を行ったのは、立場的には同じく匈奴に投降した漢の元将領として、李陵が李緒を殺したくても緒事情を配慮しなければならないため、人の手を借りようという考えに至った李陵の「打算的な性格」のためである。

しかし、中島の小説の第三章で李陵は、考えることが嫌いで、一人で馬をかけて、疲労感によってだけ辛さから救われるという人物として描かれている。この人物像は、原典から読み取れる(族滅を知る前の)「李陵の投降」と「李陵の思慮深く、打算的性格」という二つの側面には、いずれも相応しくないものである。中島の書き換えにより、李陵は寡黙で浅はかな、血気の勇で行動する人物として性格上の合致を見せている。

最後に、李陵が後の対漢戦争に参加したかどうかについてである。典拠の『漢書』の「匈奴伝」には、李陵の参戦が明確に記録されており、場所もちょうど李陵がかつて敗戦した浚稽山(現在のモンゴル人民共和国の喀爾喀の境)と記載がある。

匈奴使大將與李陵將三萬餘騎追漢軍，至浚稽山合，轉戰九日，漢兵陷陳卻敵，殺傷虜甚眾。
(『漢書』「匈奴伝」 p. 3779)

匈奴、大將を遣わして、李陵とともに三万余騎を将いて漢軍を追わせた。浚稽山に至りて合し、九日間転戦する。漢の兵士が敵陣に突入し、多くの匈奴軍を殺傷した。
(日本語訳は筆者による)

一方小説では、この浚稽山での対漢戦争について、以下のように書き換えられている。

丁度酒泉張掖の辺を寇掠すべく南に出て行く一軍があり、陵は自ら請うて其の軍に従った。しかし、西南へと取った進路が偶々浚稽山の麓を過つた時、流石に陵の心は曇つた。曾て此の地で己に従って死戦した部下共のことを考へ、彼等の骨が埋められ彼等の血の染み込んだ其の砂の上を歩きながら、今の己が身の上を思ふと、彼は最早南行して漢兵と闘ふ勇気を失つた。病と称して彼は独り北方へ馬を返した。(p. 513)

原典とは違い、小説における李陵は漢と戦うことが到底できなかったことになっているのである。この書き換えの中で、一つ留意する点は「偶々浚稽山の麓を過つた」という文である。原典では、明確に浚稽山を要衝として取り上げており、浚稽山をめぐる合戦が九日間も続いていたと書かれているので、「偶々」立ち寄つたとはとても考えられない上、将領である李陵がそれを知らないはずがないと思われる。原典における李陵は、かつて敗戦した浚稽山という場所で、故国の部隊と戦うことを覚悟した上で戦争に参加したのは明らかである。しかし、小説では、族滅の憤怒と恨みから自ら参戦を請う李陵は、浚稽山を「偶々」経由した時、不意に過去にここで自分と共に戦い犠牲になった漢の兵士たちを思い出し、今まで逃避していた過去の自分と人間性の柔軟な側面とが彼の中で漢と戦うことに抵抗し、最終的にそれが彼を圧倒したので、彼は病気と嘘をつき一人で戦場から逃げ帰つたのである。

4.2 他の人物についての書き換え

この節では、李陵以外の人物をめぐる書き換えについて分析する。その目的は、間接的に他の人物に照らして見た李陵像を考察することである。まず、李陵と「友情」関係のある匈奴単于の息子である左賢王と、漢の武将である公孫敖との戦いをめぐる書き換えについて考察する。次に、小説のもう一人の主要人物である蘇武の「匈奴人の妻と子供」をめぐる書き換えにも注目する。

まず、左賢王と公孫敖の戦いをめぐる書き換えについてであるが、小説では公孫敖が左賢王に負けた言い訳として、「李將軍」についての話を武帝に上

奏し、それが李陵の家族が処刑された原因にもなっている。そもそも、典拠における公孫敖の出兵の理由は、武帝の命令によって、公孫敖を遣って李陵を迎えるためである。一方、小説では公孫敖の出兵と李廣利、路博徳等、他の漢の部隊を合わせて「大北伐」の形で取り上げている。

この出兵理由の変更について、李(2001)は「もし原典のまま小説に使用したら李陵の悲劇性と敵に投降する合理性とは、武帝の李陵救済作戦によって弱まるばかりであろう」と述べている。しかし、小説は「武帝の李陵救済」を回避していることに加えて、公孫敖の対匈奴作戦の処理方法もまた興味深い。

小説では、「大北伐」の対戦状況について、明確に詳しく設定されているのに対して、典拠では、公孫敖がいったい匈奴軍のどの将領或いは部隊と戦ったのかは明記されていない。このように設定されている小説では、左賢王に負けた公孫敖は具体的に以下のように弁解している。

その左賢王に打破られた公孫敖が都に帰り、士卒を多く失つて功が無かつたとの廉で牢に繋がれた時、妙な弁解をした。敵の捕虜が、匈奴軍の強いのは、漢から降つた李將軍が常々兵を練り軍略を授けて以て漢軍に備へさせてゐるからだと言つたといふのである。だからといって自軍が敗けたことの弁解にはならないから、勿論、因杆將軍の罪は許されなかつたが、之を聞いた武帝が、李陵に対し激怒したことは言ふ迄もない。(p. 511)

この「李將軍が常々兵を練り軍略を授けて以て漢軍に備えさせている」という弁解について、中島が典拠における「李陵」を「李將軍」に書き換えたことはよく指摘されている。しかし、本稿で注目するのは、仮に、小説のこの段落の描写を省略して、単に公孫敖が匈奴軍に負けたと設定しても、「李陵」か「李將軍」かをめぐる誤解を問題なく引き出すことができるはずだということである。それにもかかわらず、小説では、わざわざ「李陵に師事する若き左賢王 (p. 510)」に負けたという設定にされているという点に、中島の他の意図が含まれているのではないかと考えられる。

また、物語では、李陵と左賢王の親交も描かれており、李陵が左賢王に「不図友情のやうなものをさへ感じるものがあつた (p. 510)」という描写の直後、公孫敖を含む匈奴への「大北伐」に移っている。さらに、今回の戦役に対して「勿論、全体としては漢軍の成功と匈奴の敗戦とを望んでみたには違ひないが、どうやら左賢王だけは何か負けさせたくないと感じてみたらしい (pp. 510-511)」という李陵の心理も提示している。このような緊密な構成により、李陵、左賢王、公孫敖という三人の人物の関連性は容易に連想することができる。それ故、左賢王に負けた公孫敖は、左賢王に恨みを持っていることが窺える。公孫敖が捕えた「敵の捕虜」は、左賢王側の兵士であるはずなので、この捕虜から、左賢王が李陵と親交を持ち、李陵に師事していることが分かっていたことも想像に難くない。したがって、公孫敖の弁解における「李將軍」は、意図的に李陵を暗示している可能性も十分に考えられる。そうだとすれば、李陵の族滅は、偶然性の高い「誤解」あるいは従来の観点である「運命の翻弄」など、純客観的で、外的な要因ではなく、李陵と匈奴の王子である左賢王との親交という内的な要因の影響が大きいと考えることができる。小説の中の言葉を引用すると、匈奴に根を下してしまった「数々の恩愛や義理」という、李陵自身の感情と行為が、族滅の災いを招いたと考えることができるだろう。

次に、もう一人の主要人物である蘇武に注目する。蘇武には匈奴に妻と子供がいるという典拠に見られる記載が、小説において消去されている。小説において蘇武の匈奴人の妻子に言及している場面は、蘇武と会った後、李陵が心の中で蘇武と自分を比較しているところである。中島の小説の中で、李陵は匈奴単于の娘と結婚し子供も持っているが「蘇武の場合は違う。彼にはこの地の係累もない」となっている。つまり、小説の中の蘇武は、匈奴に妻と子供がいないのである。しかし、典拠の『漢書』には「さきに匈奴を出立するおり、胡の妻がちょうど一子を産みました」と書かれており、子供の名前までも記載されている。

同じくこの箇所を書き換えに注目している研究は、陸(2015)が挙げられる。陸(2015)では、典拠で書かれている国家に忠誠を示す蘇武の息子と、典拠にも

小説にも書かれている裏切者の李陵の息子、この二人の息子の境遇を比較し、「同じ匈奴と漢との間にもうけた混血児だが、李陵の子と蘇武の子の境遇は全く正反対だと言える」と述べられている。そこから、昭和10年代の日本の時代背景と結びつけ、蘇武に表されている「昭和10年代の英雄像」を検討した。李陵は裏切り者として、その子も漢の正史から排除され、抹殺されることは理解できるが、英雄蘇武の子がその後漢の朝廷に重用されるという要素は、正に「英雄像」に相応しい展開であるのではないか。しかし、小説ではこの要素を敢えて消去しているのだから、英雄像作りと矛盾していることになる。

したがって、小説中で蘇武の匈奴人の妻子を消去するという処理によって中島は、李陵と蘇武の子供が、その後国家や歴史からどのように対処されるか、またどのように異なった人生を歩むかにより、二人の子供の人物像を差別化するのではなく、あくまでも李陵、蘇武という二人の人物に焦点を当てているのである。すなわち、小説では匈奴で「恩愛や義理」といういわゆる家族愛や友情などを持っている李陵と対比するために、蘇武は十九年間匈奴に滞在しても、匈奴と何一つ関らず、身のまわりに誰もいないし、必要もないという人物として描かれている。

小説のこの場面における李陵の長い内面描写の中で、彼の蘇武に対する疑問と、自分と蘇武との比較をまとめると、表2のようになる。

表2 蘇武と会う時の李陵の内面描写

要素	李陵	蘇武
A. 自殺しない理由	①「恩愛や義理」： 匈奴人の妻子、 左賢王との友情など	①「係累なし」： *匈奴人の妻子(消去)、 於軒王との親交(弱化)
	②(今更死んでも) 「(漢に)義を立てない」	②(漢に対する忠信を堅持している) 「臣節ある」
B. 何を目あてに生きているのか	① なし	① 誰にもみとられずに独り死んでいくに違いない。
	②せつかくの行為が空しく、漢にまで聞こえないであろうことを恐れて、ついに決行の機を見出しえなかった。	②自分の行ないが漢にまで知られることを予期していない。

この場面の内面描写における最後の一文「人に知られざることを憂へぬ蘇武を前にして、彼はひそかに冷汗の出る思いであつた(p. 519)」は、李陵自身の蘇武との比較の結論とも言える。「人に知られざることを憂へぬ」は、『論語』における「人不知而不慍、不亦君子乎」(人知らずして怒らず、また君子ならずや)から由来しているのではないかと考えられる。すなわち、人に知られるかどうか、認められるかどうか、そのようなことを気にしない、君子というものはこのような人である。表4にまとめているように、二人の自殺しない理由にしても、生きている目当てにしても、いずれも二重の考えが含まれている。つまり、「人に知られざる」における「人」は、表における「A. ①」

「B. ①」という自分の家族、友達など、自分とかかわりのある、身のまわりの人々である。そして、「A. ②」「B. ②」内の「漢」が象徴している「人」は武帝、李陵の家のある隴西の士大夫ら、一般庶民としての漢の人々である。

李陵は無論この二つの意味での「人」から、自分はどう思われているのかを気にしている。しかし、蘇武は「人に知られざることを憂へぬ」のである。「匈奴人の妻子」という書き換えをはじめ、匈奴での家族や匈奴人との友情などの話を消去または弱体化させることにより、一方の意味としての「人」が蘇武に存在しないことになっている。それゆえ、蘇武は「誰にもみとられずに独り死んでいくに違ひない」と李陵に判断されている。次に、「蘇武の口うらから察すれば、今更そんな期待(筆者：漢に帰れること)は少しももっていないやうである」、「しかも此の男は自分の行が漢に迄知られることを予期していない」などの描写により、もう一方の意味での人、つまり「漢」の武帝、「漢」の人々が、蘇武の武帝に対する臣節と、漢に対する忠信を知っているかどうかさえも、蘇武は気にしていないことがわかる。それゆえ、李陵と対照的な、二つの意味の「人」に「知られざることを憂へぬ」蘇武像が成立したのである。

5. 原典比較による李陵像

以上の書き換えから、中島の李陵像における三つの特徴が読み取れる。まず、特徴1は「武帝の詰問」、「李緒を殺す」、「左賢王と公孫敖の戦い」と

いう三つの書き換えにより、人物の性格上の特徴として、「感情的、衝動的に行動する」という傾向が見られる。例えば、「武帝の詰問」をめぐる書き換えで、李陵は君主の武帝に怠慢な態度をとり、武帝の怒りを招くという、後に生じる災いの種を蒔く。そもそも、平穩な「輜重の役」から「無理やり出撃部隊の役を請う行為も、成功率が低く、あまりにも衝動的な行為である。また、「李陵と左賢王の友情」は、まだ(心から)投降もしておらず、機会があれば漢に戻りたい李陵にとって、あまりにも不謹慎である。さらに、この不謹慎な行為は、李陵が心から敵側の王子に「友情」を感じていることの表れでもあるので、李陵の感情的な性格が浮かび上がってくる。ゆえに、従来論じられている偶然性の高い「運命の翻弄」が李陵の悲劇の原因というより、この人物自身の感情的で、衝動的な性格と行為が、本当の原因なのではないかと思われる。

次に、特徴 2 と特徴 3 は、それぞれ作者レベルと主人公レベルで、「自己」と「他者」の問題が浮かび上がっていることである。特徴 2 は、作者レベルで考えると、「他者との複雑な人間関係が、李陵の人生の転回と関わっている」ということが読み取れる。武帝への不敬と怠慢により、李陵は肝心な支援部隊を失う。部下である管敢の裏切りの背後には、李陵の「簡単」な命令により、殺される彼の「妻」という要素が潜んでいる。李陵の漢の家族が殺されることに至る「誤解」には、李陵と左賢王の友情が根源にある可能性が高い。このような一連の李陵の「運命」の転換は、実は全て彼と周りの他者との複雑な人間関係が深く関わっている。そこから、作者の設定に潜んでいる意図が読み取れる。

特徴 3 は、中島の李陵は、自分の才能や気持ちを非常に重視していると同時に、他者の存在、とりわけ他者から自分がどう思われるかも非常に気にしている。最初に、李陵の出撃部隊の役を請う行為自体、彼の自分の才能への自負から発せられたものである。また、武帝や自分の部下など、他者との関係を気にせず、淡々と事態を処理していることからみても、李陵は他者の機嫌を取ることより、自分自身の軍事的才能に頼っている。つまり、戦いで勝てば、名誉や功績、武帝からの褒美や、部下同僚からの尊敬は自然に得られるものである、

という考えが潜んでいるのではないか。また、「陵(自分)一個」の問題では、より明確に「個」という自分と「他人」との対比関係が持ち出されている。小説前半で造形されている「陵一個」を後回しにする李陵が、後半では、「他人の不幸を実感するには、余りに自分一個の苦しみと闘ふのに懸命であつた(p. 514)」という、自分の気持ちですでに胸がいっぱいで、他人の気持ちを感じる余裕もない人物になっている。次に、中島の李陵は、他者から自分がどう思われ、どう見られているかも、非常に重視していると考えられる。「対漢戦争の参加」をめぐる書き換えで、李陵は、今まで逃避していた「過去の自分」が捨てがたく、「過去」に対しては感情的である。それはもちろん、前述の「感情的、衝動的」という人物の性格にも相応しいことである。一方、かつて李陵に従って戦死し、「己の為に身命を惜しまぬ(p. 486)」部下の存在を、李陵はどうしても無視できないのである。たまたまかつての戦場を過ぎただけで、李陵は旧部下たちの「骨」、「彼等の血」を生々しく感じ、部下たちの亡骸が砂の上を歩いている李陵の足を束縛し、部下たちの存在、あるいは彼らが従った過去の自分の存在が、李陵の心をつかみ、彼の戦う勇気を失わせたのである。最後に、李陵と蘇武の対比により、「知られざることを憂へぬ」蘇武と異なり、李陵は身のまわりにいる家族や友人、そして漢の武帝から庶民まで、という二つの意味での「人」に、自分(のしたこと)が知られるかどうか、理解と評価が得られるかどうかを非常に重視していることが分かる。

したがって、中島の李陵は常に、他者から自分がどう思われるか、他者からどう見られているかを過剰に意識している。蘇武をはじめとする友人や家族等身近な人々から、自分と実際の関わりのない漢の「天下」の人々までを含めた、他者の存在、他者からの評価、他者の目に映っている自己像こそが、李陵の自己認識であり、他者からの評価が李陵の意識の中で過剰に拡大されている。即ち、中島の李陵は一種の自意識過剰だと言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

中島敦の『李陵』をめぐる従来の研究では、「運命の悪意」がテーマだと

いう説が主流であるが、本稿では、典拠との比較によりこの作品を再検証した。その結果、中島の李陵の悲劇性は、外在的で偶然性の高い運命というより、やはり李陵自身にあり、とりわけ李陵をめぐる「自己」と「他者」の問題にあるという結論に至った。

また、李陵はある決まった自己像を持っておらず、李陵の自己認識は、自分が持っている絶対的なものより、他者の評価に過剰に頼っている。それゆえ、他者の評価を得るために行動を変えたり、進む道を選んだりして、彼の自己像も他者の評価に従い始終変化しているものである。ゆえに、中島の李陵の悲劇性も、彼自身のそのような「自意識過剰」にあると結論づけたい。

中島の作品には、「自己」と「他者」の問題を取り上げ、自意識過剰な主人公が描かれている作品は他にも見られる。例えば『山月記』の李徴、『わが西遊記』の悟浄などが挙げられる。『李陵』を踏まえたうえで、中島の他の作品における「自己」と「他者」の問題に対する考察は、今後の課題とする。

<参考文献>

- 閻瑜(2006)「李陵」の「述而不作」『大妻国文』37、大妻女子大学、pp.59-78
- 夏文婷(2012)「中島敦の中国古典「借用」研究:未完成の歴史小説「李陵」をめぐって」『文芸研究』9、近畿大学大学院文芸学研究科、pp.1-28
- 佐々木充(1976)『中島敦の文学』、桜楓社
- 中島甲臣(1997)「中島敦論 文字・歴史・歴史記述:「李陵」、「文字禍」を中心として」『北海道武蔵女子短期大学紀要』29、北海道武蔵女子短期大学、pp.1-38
- 村田秀明(1995)『中島敦『李陵』の創造:創作関係資料の研究』、明治書院
- 李俄憲(2001)「中島敦『李陵』考:李陵とその死の問題を中心に」『山口国文』24、山口大学、pp.31-39
- 陸嬋(2015)「中島敦の『李陵』に関する一考察:「匈奴」という接点について」『言語・地域文化研究』21、東京外国語大学大学院総合国際学研究科、

pp. 111-131

渡辺ルリ (2006) 「中島敦『李陵』論」 『叙説』 33、奈良女子大学、pp. 268-287

使用テキスト

『中島敦全集』 1、筑摩書房、2001（『李陵』は第1巻所収）

参照原典

司馬遷『史記』中華書局、1972

班固、(顔師古注)『漢書』中華書局、1975

本田濟編訳『漢書;後漢書;三国志列伝選』平凡社、1968

連用形名詞の使用をめぐって
—位相語としての連用形名詞を中心に—
The Nominalization of Renyōkei Verbs :
Focus on the Use of Renyōkei Nouns as Isōgo

Duong Thi Hoa ⁽¹⁾

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 D1

要旨

動詞の連用形の名詞化と位相語の関係について、語用論（発話の場）の観点から説明を試みた。結論として、連用形名詞が位相語としてよく使用される原因は「何回も繰り返し行う動作」にあるのではないかと思われる。つまり、特定の分野で一つの動作が何回も繰り返される場合、次第にその分野の人たちはその作業を表す動詞を聞くだけで、すぐに動作主がだれであるか対象物が何であるかが暗黙のうちに理解できるようになる。そのため、位相語のような場合、動詞の連用形が単独でも容易に名詞として使用されるのではないかと考えられる。

キーワード：連用形名詞、位相語、繰り返し行う動作

Abstract

This paper is about the relation between nominalization of Renyōkei verbs and Isōgo (位相語), specifically focussing on the reason why when Renyōkei is used as Isōgo, it is easier to be nominalized. It is assumed that is the nominalization of the *repeated action* is easier. It is because those actions are repeated many times, both speaker and listener understand that who performs that action and what is the

⁽¹⁾ e-mail : duonghoa133@gmail.com

object of that. Thus, in some specific fields, the nominalization of Renyōkei can be made.

Keywords : nominalization of Renyōkei, Isōgo, repeated action

1. はじめに

動詞の連用形の名詞化については様々な観点から研究が進められてきた。その一部に、連用形名詞を位相語として使用される傾向があると指摘したもの（（金、2003）（陳、2006））がある。しかし、これらを含め、ほとんどの先行研究では、通時的な観点をとるかあるいはいくつかの分野において、このような位相語があるとするなど、いわゆるその状況を述べただけで、なぜ連用形名詞が位相語としてよく使用されるのかを説明するものは管見の限り見当たらない。位相語としてよく使用されるということは、言い換えれば、動詞の連用形が位相語としてなら名詞化しやすくなるということになる。しかし、そのような連用形名詞と位相語との関係や、具体的になぜ位相語としてなら動詞連用形が名詞化しやすくなるのかという点については不明である。

そこで、連用形名詞と位相語の関係を明らかにするために、採集した用例を示しながら語用論の観点から説明を試みたい。

2. 用語の定義と先行研究

連用形の名詞化と位相語との関係を論じる前に、「連用形名詞」と、「位相語」とはどのようなものかを明らかにしておきたい。まず、連用形名詞について、西尾（1961）の定義では、「連用形名詞とは、現代日本の共通語で用いられる名詞のうち、動詞連用形から成り立ち、あるいは動詞連用形を含むもので、しかも、普通の言語意識において、特別の知識なしに、多少の反省意識が働けばその語構造を把握しうるもの」である。例としては「動き」や「働き」のような単独の連用形名詞及び「焼きそば」や「受け付け」などの複合語の連用形名詞等が挙げられる。

一方、位相語について、田中（1999）は「社会的な集団や階層、あるいは、表現上の様式や場面それぞれにみられる、言語の特有な様相を「位相差」と呼

ぶ」と述べている。また、米川(2002)によれば、「位相」は言語表現が異なること(現象)を指すのではなく、社会的属性・言語様式・伝達様式・心理・言語意識などの様相を指し、その位相の違いによって生じる言語的変異(バリエーション)を「位相語」と呼ぶ」と定義している。

「位相」の分類として、田中(1999)は位相差をもたらす要因によってそれぞれ「社会的位相」、「様式的位相」「心理的位相」に分けている。また、米川(2002)は田中(1999)の「社会的位相」を、(1)性差によるもの、

(2)世代差によるもの、(3)社会集団差によるものという主な3種類に分けて分析した。(3)の社会集団差による位相には「女房ことば」「武士ことば」「若者語」「業界用語」があると指摘している。

本稿で取り扱っている「位相語」は上記の3種類の内、(3)の社会集団差による位相に基づくものであるが、多少異なる点がある。本稿が対象にする位相語とは、同じ職場で仕事をする仲間の間や同じ趣味を持つ人たちの間などで、「同じの分野で一定の関係、共通点を持つ人たちの間で使用される、その分野に関する言葉」を指している。そのため、以下に述べる位相語は「分野別の位相語」であり、名称も「冶金に関する分野」や「離乳食に関する分野」などと表されるように、「～分野」といったものを指す。

既に述べたように、連用形名詞が位相語として使用されるケースが多いことは先行研究も指摘されているが、なぜ位相語になると連用形が名詞化しやすくなるかという理由を述べた研究は管見の限り見当たらない。位相語であると連用形が名詞化しやすくなるのには、連用形名詞と位相語の間に何らかの特別な関わりがあるからだと考えられる。

Hoa(2014)では、全ての連用形は名詞化が可能であるという仮説を立てて、それを証明するために用例採集を行った。その結果、動詞連用形の名詞化率が先行研究で述べられている3割～4割よりも遥かに高いことが窺えた。また、連用形の名詞化を可能にする環境について、「位相語」は、一つのキーワードになることも明らかになった。以下にHoa(2014)での用例採集とその考察を紹介した上で、連用形の名詞化を位相語の観点から分析していく。

3. Hoa (2014) による動詞の連用形の名詞化現状について

Hoa (2014) は「全ての動詞の連用形が名詞化できる」という仮説を立て、連用形が単独で最も名詞化しにくいとされる動詞グループを対象に、連用形が名詞として使用される用例を採集することによりその仮説を証明した。Hoa (2014) で対象となった動詞は沈 (2013b) によって最も名詞化しにくいとされた公式「下位事象+上位事象」を持つ動詞である。そのような動詞とは、「開ける」「空ける」「奪う」「着ける」「食べる」「はく」「貼る」「減らす」「沸かす」の9つの動詞で、そのうち「はく」という動詞はズボンをはく意味の「穿く」と靴をはく意味の「履く」の2つの漢字で検索されるものである。また、Hoa (2014) は他の先行研究とは異なり、辞書の見出しや新聞等からではなく、ブログやコマーシャル、フォーラムなどから連用形名詞の用例を検索した。

以上の9つの動詞を対象に、その連用形が名詞として使用されるかどうかをインターネット検索エンジンであるグーグルで検索した結果、9つの動詞連用形全てに、単独で名詞として使われる用例が見つかった。それぞれの動詞の連用形が名詞として使用されている用例数は「開け」154例、「空け」29例、「奪い」117例、「食べ」226例、「着け」17例、「はき」28例、「貼り」239例、「減らし」76例そして「沸かし」124例である。

このように、一見名詞化できそうにない動詞の連用形でも、名詞として使用される用例は少なくない。また、9つの動詞のうち7つは、特定の分野の位相語として使用される傾向が強いことも分かった。以下に Hoa (2014) による位相語としての連用形名詞を紹介し、それから連用形名詞と位相語の関係を分析してみたい。

4. 連用形名詞と位相語の関係について

最も連用形が名詞化しにくいとされる9つの動詞のうち、位相語として使用される連用形名詞は (1) 開け、(2) 奪い、(3) 食べ、(4) 着け、(5) 貼り、(6) 減らし、(7) 沸かしである。残りの「空け」と「はき」は用例数が少ないこともあり、内容

も一定の分野に関する用例ではないため、特にどこかの分野の位相語であるとは認められなかった。

それぞれの連用形名詞が位相語として使用される分野は多義にわたっている。例えば、「減らし」のような編み物に関する分野や「沸かし」のような冶金に関する分野のものもあれば、「開き」のようなオートバイという分野に興味を持っている人たちの間で暗黙に理解されるもの等がある。それぞれの連用形名詞の使用の傾向をまとめると以下ようになる。

- (1) 「開け」は 154 例の内、32 例 (20.8%) がオートバイレースやオートバイの練習に関する文章に使用されていた。また、「針の開け」など、パチンコを話題にする際の「開け」の用例は全部で 22 例 (全体の 14.3%) であった。
- (2) 「奪い」はサッカーの分野において、使用されている用例が 19 例あり、全体の 16.2% を占めている。
- (3) 「食べ」については、226 例のうち、子どもが離乳食を食べる様子を表したものが 85 例 (全体の 37.6%) で、ペットの餌の食べぶりについて表したものは 119 例 (全体の約 52.7%) である。
- (4) 「着け」は、17 例の内、7 例 (全体の 41.2%) は印刷機や印刷技術についての用例であった。「着け」に関する用例には、「インクの着け」や「給水の着け」などがある。ここでの「着け」はプリンターの「着けローラー (Form Roller)」が略されたもので、徐々に「着け」だけが印刷業界の位相語に発展したと思われる。
- (5) 「貼り」は、239 例の内、31 例 (12.9%) がバイクや車などの車両に装飾用ステッカーを貼ることを指す時に使用され、全体の 12.9% を占めている。また、家の外壁、天井等に専用紙やグロスを貼る業務に対して「貼り」で表現する用例が 28 例で、全体の 11.7% を占めている。
- (6) 「減らし」では、編物の目数を減らす技術の意味を表す「減らし目」という用語がある。その「減らし目」が現在、「減らし」だけの形でも編物を

する人々の間で通用している。編み物に関する「減らし」の用例は全部で30例で、全体の39.5%を占めている。

- (7) 「沸かし」では、採集した「沸かし」の124例の内、天然温泉ではなくお湯を沸かす温泉の種類を「沸かし」と表示する用例が48例あり、全体の38.7%を占めている。また、鍛冶屋業界では「鉄を溶解寸前まで高温過熱すること」を「沸かし」と言い、鍛冶屋業界の用語としての「沸かし」は21例（全体の16.9%）採集できた。

以下の表は、連用形名詞が位相語として使用される分野をまとめたものである。

表1 連用形名詞が位相語として使用される分野

番号	連用形名詞	位相語として使用される分野
1	開け	オートバイ、パチンコ
2	奪い	サッカー
3	食べ	離乳食、ペットの餌の食べぶり
4	着け	印刷
5	貼り	ステッカー装飾、家の装飾
6	減らし	編み物
7	沸かし	温泉、冶金

なぜこのように位相語の場合、動詞の連用形がより名詞化しやすくなるのだろうか。本稿は語用論の観点、具体的に「発話の場」に注目してその原因を明らかにしたい。

「発話の場」とは、話し手が意思伝達、呼びかけなどの目的で相手に対して（話したり書いたりすることによって）言葉を述べた時の場面を示すものである。「発話の場」は単なる空間（場所）を指すだけではなく、その場にいる人々の関係、関わり（背景）も含意している。例えば、職場で同僚に何かを伝えるといった場合の「発話の場」は「同じラインで作業をする同僚と一緒にいる工場」を指す。また、観光サイ

トなどに観光地を紹介する文章を投稿する際は「観光に関心を持っている人が読んだりみたりする観光サイト」が「発話の場」となる。

このような「発話の場」の観点から分析すると、動詞の連用形の名詞化と位相語にどんな関係があるのだろうか。影山（1999）によれば、名詞化という操作は、動詞がもつ意味構造（行為連鎖）の全体あるいは一部分を切り取って、デキゴトまたはモノという名詞の概念に変えることである。動詞の働きかけの力が強ければ、動作・行為と対象物の関係がより強い力で結ばれ、行為連鎖から切り取る(名詞化する)際、対象物と一緒に切り取るといったことが要求される。したがって、言語表現では、項と結合して複合語の形で名詞化することが多いため、動詞の連用形は単独の形よりも他の要素と結合して複合語になった方が名詞化しやすいと言われる。例えば、「焼き」は単独では名詞として使用されにくいだが、「卵焼き」や「焼き魚」のように他名詞と結合すれば複合語の名詞になる。しかし、「発話の場」の観点からすれば、「位相語」の場合、その位相語として使用される「発話の場」の特徴から、動詞の連用形が動作主や動作の対象物等の項と結合しなくても単独で名詞化することができる。ある作業を成し遂げるためには、一連の動作が順番に行われなければならない。例えば、一つのセーターを編むという作業の中には、脇や首の部分の編み目を減らすという動作が含まれる。また、日本刀を作り出すためには、まず材料の鉄を一定の温度まで高温加熱しなければならない（つまり、水やなんらかの液体を熱して、沸かすことが必要である）。このように特定の分野で、ある作業が何回も繰り返される場合、次第にその分野の人たちはその作業を表す動詞を聞くだけで、すぐに動作主がだれであるか対象物が何であるかを暗黙の内に理解できるようになる。そのため、このような「減らし」や「沸かし」は業界用語となり、動詞連用形が単独でも容易に名詞として使用されるのではないかと考えられる。

また、業界用語ではなくても、ある種のグループ内で対話するという「発話の場」では、同じ話題について何度も対話する内に、その話題の中でよく言及される行為や動作について、その動作を聞くだけでも、動作主がだれであるか、動作の対象物が何

であるかがすぐ理解できるようになる。このように、特定の「発話の場」があることによって、動詞の連用形は単独でもそれが表す意味内容の解釈が可能となり、使用されやすくなるのである。

さらに、このような単独の動詞連用形は複合語の動詞連用形などと比べて言語形式が短いため、職人同士での話や同じ趣味・関心を持っている人々が読んだり書いたりするウェブサイトの中で効率よく用いられているのだと考えられる。また、これらの言葉をグループ内の隠語として使用すれば、仲間意識が高まる効果もあるのではないかと思われる。つまり、「食べ」という語だけを聞けば違和感を覚える日本語母語話者は多いかもしれないが、だからこそそのような特別な言葉を使って会話することで、自分がこのグループに属している、この分野をよく知っているとアピールすることにもなり、仲間意識をより強調することになるのだと思われる。

5. まとめ

本稿は連用形名詞と位相語の関係について「発話の場」の観点から分析を試みた。文法上の制約により名詞化しにくいと判断される動詞の連用形でも、位相語としては使用することができ、「発話の場」が特定されることによって、その限られた部分（名詞になるために不足している特徴）が補充されて、単独で名詞化できる場合が多いことが明らかになった。そのため、動詞の連用形が位相語としての場合は名詞化しやすくなるのだと思われる。

<参考文献>

- 影山太郎(1998)『動詞意味論』くろしお出版
影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版
金美淑(2003)「日本語の連用形名詞」名古屋大学大学院文学研究科博士論文
田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院
陳世娟(2003)「和語動詞の名詞化についての一考察—単純動詞 734 語を中心に」『東洋大学大学院紀要』40号
陳世娟(2006)「単純和語動詞の名詞化についての一考察—位相から見る「切り」

- と「切れ」の意味用法を中心に」『東洋大学大学院紀要』43号
- 西尾寅弥(1961)「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43
- 村岡正章(1995)「典型的な動詞連用形名詞」に関する一考察」『上智大学国文学論集』28号
- Duong Thi Hoa (2014)『連用形名詞の使用をめぐって』大阪大学言語文化研究科修士論文
- Shen Chen (2013 a) 「日本語連用形名詞の自立性の段階について」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
- 沈晨 (2013 b) 「日本語動詞名詞化における動詞の語彙意味による制約について」『日本語文法学会第14回大会発表予稿集』

**接触場面における日本語のオーバーラップ発話
—「ターン取りのため」のオーバーラップを中心に—
Overlaps in Japanese Conversations in Contact Situations:
Focusing on “Overlaps for Turn-taking”**

徐 麗潔⁽¹⁾

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 M2

要旨

本稿は、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の接触場面において、会話参加者がどのようなオーバーラップ発話を、どのような機能で用いているのかを分析した。分析の結果、母語話者は学習者に比べ、会話の進行を促進することも妨害することもない「中立的」なオーバーラップ発話を使用する傾向があるということがわかった。一方、学習者は「ターン取りのため」のオーバーラップ発話を使用する傾向があるということが観察された。さらに「ターン取りのため」のオーバーラップ発話には、「うんうん」、「ええ」のような相手の意見を受け入れるあいづちと「あ」、「でも」、「あのー」のような相手の注意を引く言語形式が使われることがわかった。
キーワード：オーバーラップ、機能、出現位置、ターン取り

Abstract

This research focuses on “overlaps in Japanese conversations” in contact situations between the native Japanese speakers and the native Chinese learners of Japanese to see what kind of overlaps they use in different functions. The result shows that the native Japanese speakers tend to use “neutral overlaps” which

⁽¹⁾ e-mail: xulijie0905@hotmail.com

neither promote nor obstruct conversations. On the other hand, the native Chinese learners of Japanese tend to use “overlaps for turn-taking”. Furthermore, it also shows that there are two kinds of words used in “overlaps for turn-taking”. One is back-channel word, such as “unun” and “ee”, which is used when accepting opinions. And the other one is the word which is used for paying attention, such as “a”, “demo”, and “ano”.

Keywords : overlap, function, appearance position, turn-taking

1. はじめに

日本語の日常会話において、例1のように複数の会話参加者の発話の一部または全体が重複するという現象はよく見られる。本稿では、これを「オーバーラップ発話」と呼ぶ。

例1 「店長についての話題」

- 049C2 : えでも今回の **[店長もいいんで**
050J2 : _____ (0.5) も[ういいよね ども前を知ってたら
- 051C2 : _____ あーそつ
052J2 : 前のほうがいいってけっこうみんな言うかもしれない
- 053C2 : か で うん なんて [やめたの?
054J2 : _____ **[前の人はほんとにやさしあー あの一**
(後略)

Sacks, Schegloff, Jefferson (1974) の研究では、オーバーラップ発話は「ルールに違反するもの」と見なされ、話し手のターンの維持を脅かしているとされているが、藤井(1996)は、「日本語の場合は、先行発話への同意、共感、関心などを積極的に示し、会話を促進させ、話者同士の連帯感を強める協力的

な性格を持つ」と主張している。生駒（1996）の「発話の重なり」、深澤（1997）の「割り込み発話」、都（2004）の「同時発話」等、日本語の会話に現れるオーバーラップについて、機能の面から分析している研究は多いが、オーバーラップに使われる言語形式についての研究はあまり行われていない。よって、本稿では、会話参加者がどのようなオーバーラップ発話を、どのような機能で用いているのかを、中日接触場面で行われた日本語会話を資料として分析する。

2. 先行研究

2.1 ターンと話者交替

「話者交替システム (turn-taking system)」とは、会話参加者は会話という活動の中で、一定のルール^②に従い、発話権を順番に交替しながら会話を展開していくというものである。日本語においても、話し手が発話権を取得して発話を始め、ポーズを置くことや他の話し手の発話によって区切られ、話すのをやめるまでのひとまとまりの発話がひとつのターン^③ (turn) であると考えられる。本稿では、これを分析の単位とする。ただし、「うん」、「はい」、「そうですか」などの実質的な内容を持たないあいづち的な発話^④は、単独なターンとして認めない。

2.2 オーバーラップの機能

生駒（1996）は、オーバーラップ^⑤発話の機能を会話の進行と人間関係の確立という2つの観点から分析している。生駒（1996）は、先行発話の途中で

^② Sacks, Schegloff, Jefferson (1974) の「他者選択」、「自己選択」、「再自己選択」の3つの基本的なルールを指す。詳細は、Sacks, Schegloff, Jefferson (1974) を参照されたい。

^③ これは、金（2002）の定義に、筆者が修正を加えたターンの定義である。

^④ 杉戸（1987: 88）の「あいづち的な発話」と「実質的な発話」を参照されたい。

^⑤ 生駒（1996）は「発話の重なり」と呼んでいる。

重なる予測的なオーバーラップ発話を割り込みと見なしている。深澤（1997）は、このようなオーバーラップによる「割り込み」を、機能の観点から以下のように分類している。

- (1) ターン取りのための割り込み：話し手の発話がまだ終わっていないうちに、ターンを取る目的で他の参加者が発話を割り込ませるもの。
- (2) 話し手への働きかけのための割り込み：現在の話し手に対して情報を提供したり、質問、コメントなどを伝える目的で発話を重ねるもの。現在の話し手がそのまま発話を続ける。
- (3) 早めの発話開始のための割り込み：現在の話者の発話が終わりかけているところや、付加疑問文などがある部分で、早く次の話者が話し始めるために起こる割り込み。

本稿では、以上の機能を参考とし、割り込みだけではなく、オーバーラップ全体を考察する。今回は、ターン取りを目的とするオーバーラップ発話に焦点を当て、分析を行う。

3. 調査方法

中国語を母語とする上級日本語学習者 3 人（以下 C1、C2、C3）と日本語母語話者 3 人（以下 J1、J2、J3）の接触場面における 1 対 1 の会話（以下 CJ 会話）データを採取した。学習者は全員、日本に滞在している留学生であり、会話は 20 代の実際に親しい友人同士で行われたものである。テーマは会話参加者に自由に決めてもらい、「普通の友人同士のおしゃべりのように話してください」と指示した。会話参加者全員に本研究の内容については一切知らせず、会話研究のためのデータの収集であると前もって伝えた。

各会話は 10 分～15 分程度であり、録画を行った。時間が経つにつれ、会話参加者がだんだん録画されていることに慣れ、自然な会話に近づくと考え、各

会話開始からの1分間を除外した。

3.1 調査対象

調査対象とした上級学習者3人、また母語話者3人の情報は表1の通りである。被調査者は、日本語能力試験や日本語学習歴、日本滞在歴及び「自分の言いたいことを相手にはっきりと伝えられる」だけの日本語会話能力を備えていることから、全員上級学習者であると判断した。母語話者は全員、関西出身である。

表1 本稿の会話参加者情報

		年齢	性別	日本語学習経歴	テーマ
CJ会 話①: 14分 08秒	C1	24	女	N1を取得した日本の大学院の留学生；日本語学習歴は6年2か月；日本滞在歴は3か月	文学の授業
	J1	27	女		
CJ会 話②: 13分 05秒	C2	23	女	同上；日本語学習歴は4年4か月； 日本滞在歴は1年2か月	アルバイト
	C2	24	女		
CJ会 話③: 11分 06秒	C3	25	女	同上；日本語学習歴は6年3か月； 日本滞在歴は1年7か月	漫画、部屋の飾り、晩ご飯
	J3	25	男		

3.2 分析方法

(1) データの文字化

主にザトラウスキー（1993）と串田（2006）の文字化の記号を利用し、会

話データを文字化した。

(0.4) ()の中の数字は10分の1秒単位で表示される、沈黙の長さを示す。

(0.4)は0.4秒の沈黙である。0.2秒以上の沈黙の長さを示す。それ以外の沈黙を「ごく短い沈黙」と見なす^⑥。

一 「一」の前の音節が長く延ばされていることを示す。「一」の数が多いほど、長く発せられたことを示す。

? 疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。

{ } {}の中の行動は非言語的な行動であることを示す。

() ()の中の発話は記録上不明瞭な発話であることを示す。

(ザトラウスキー, 1993 : 59-60)

[] [は、2人の発話や音声を重ね始めた時点を示す。]は、発話や音声の重ねが終了した時点を示す。

(串田, 2006 : 14)

(2) オーバーラップの抽出

本稿では、オーバーラップを「実質的な発話からなるオーバーラップ」と「あいづちからなるオーバーラップ」に分類した。さらに、「実質的な発話からなるオーバーラップ」を「実質的な発話のみ」のオーバーラップと「あいづち+実質的な発話」のオーバーラップと、「あいづちからなるオーバーラップ」を「あいづちのみ」のオーバーラップに分類した。具体的な例を、次の表2に示す。

^⑥ 本稿では、「掃除しないとだめ 私 夜」の中の「空白」で、「ごく短い沈黙」を示す。

表2 本稿のオーバーラップの分類

オー バー ラッ プ	実質的 な発話	実質的 な発話 のみ	243C2: 出したら? どう[なるの? 244J2: 出したら [出したら別] 245C2: 246J2: に何も言われたいけど
		あいづ ち+実 質的な 発話	139C1: あの [感じなんですね 140J1: [あ なるほど それなんか] 141C1: 142J1: ちょっと なんかアイデンティティ
	あいづ ち	あいづ ちのみ	119C1: [あのー同じ物語に基づいて 120J1: [うん]

文字化された会話データからオーバーラップの発話（網かけ部分）を抽出し、表2の枠組みによって分類した。

(3) オーバーラップの機能

2.2で提示したように、深澤（1997）は、あいづち以外のオーバーラップを分析対象として、機能の観点から「ターン取りのため」、「話し手への働きかけのため」、「早めの発話開始のため」の3つに分けている。本稿では、「ターン取りのため」をさらに「a ターンを取った」と「b ターンが取れなかった」に分け、オーバーラップの出現位置により「a-1 同時発話開始」、「a-2 発話途中」、「a-3 発話終了直前」に細分した。「話し手への働きかけのため」に、「話し手の発話に対するまとめ」を加えた。以上のいずれの分類にも分けられないものを「その他」とした。

本稿では、表2に示したように、オーバーラップを「実質的な発話のみ」、「あいづち+実質的な発話」、「あいづちのみ」の3つに分けているが、今回は「実質的な発話のみ」と「あいづち+実質的な発話」のオーバーラップを分析対象とする。

4. 分析結果

本稿ではまず、中日接触場面で使用されたオーバーラップ全体の傾向について述べ、次に、「ターン取りのため」のオーバーラップについての分析結果を報告する。

4.1 全体の傾向

今回の中日接触場面で使用されたオーバーラップの機能と出現数を、以下の表3のように示す。

表3 本稿で使用されたオーバーラップの機能分類と出現数

機能 \ 出現数			日本語母語話者		中国語を母語とする 日本語学習者	
			各項目の出現数	小計	各項目の出現数	小計
(1) ターン取りのため	a ターンを取った	a-1 同時発話開始	3	14	2	17
		a-2 発話途中	8		8	
		a-3 発話終了直前	3		7	
	b ターンが取れなかった	0	0	1	1	
(2) 話し手への働きかけのため	a 質問	6	7	4	8	
	b 情報提供	0		2		
	c 聞き手の感想	1		0		
	d 話し手の発話に対するまとめ	0		2		
(3) その他	a 質問に対する早めの回答	4	21	1	7	
	b 相手のあいづちと重なる自発話の継続	17		6		
合計				42		33

表3を見ると、今回のデータでは、母語話者と学習者の使用するオーバーラップの出現数は42:33とあまり差がないことがわかった。差が最も大きいのは、例2のような「相手のあいづちと重なる自発話の継続」である。

例2「漫画の話題」

057C3: そう[ですね うん

058J3: [ひ 人の痛みが わかるよう

059C3: はい

060J3: になった うん ねー (0.5) これでも

(J3の発話が続く。後略)

母語話者(J3)は学習者(C3)の057「そうですね」というあいづちに重ねて、058「[ひ 人の痛みが…」と自発話を継続している。このオーバーラップ発話は、自分の先行発話の直後に現れ、相手のあいづちと重なっていても、会話の進行を促進することも、妨害することもなく、中立的なものである。この中立的なオーバーラップの出現数は、母語話者で17回、学習者で6回であり、母語話者にはこのような中立的なオーバーラップを多く用いる傾向があるのではないかと考えられる。それに対して、学習者は「(1) ターン取りのため」のオーバーラップをより多く使用している。表3を見ると、学習者の(1)ターン取りのためのオーバーラップ「a-1 同時発話開始」、「a-2 発話途中」、「a-3 発話終了直前」は合計17回である。母語話者の14回に比べ、その差は大きくはないが、やはり学習者のほうが多い。学習者は中立的なオーバーラップよりも、会話の進行に影響があるオーバーラップを使う傾向があると考えられる。

4.2では、この「ターン取りのためのオーバーラップ」について詳しく見ていく。

4.2 ターン取りのためのオーバーラップ

a-1 同時発話開始

例3～例5のいずれも、オーバーラップをした話し手が、オーバーラップされた話し手と同時に話を始めた例である。

例3「退勤時間の話題」

083C2 :

084J2 : あー— そう だから9時まで働くのをやめた

085C2 : そうそうそう[そう [私も (0.3) [私も

086J2 : [うん{頷き} [でも [{頷き}

087C2 : あのー8時までって

088J2 : あー{頷き} でもねその時は

(J2の発話が続く。後略)

例4「アルバイトの仕事内容の話題」

201C2 :

202J2 : 掃除やーとしないとだめゴミ掃除しないとだめ

203C2 : [バイトいやだなー [でも

204J2 : 私 [夜 うん [いゝバイトって

205C2 : [でも そうねー でも(スーパー名)のほう

206J2 : 何[を うん

207C2 : が自動的にお金を計算するじゃん (スーパー名)は

208J2 : あー

(C2の発話が続く。後略)

例5 「ある怖い小説の話題」

115C1: [あの小説ですが あの一 舌を二つに分けて

116J1: [あー{頷き} うん{頷き}

117C1: はい [あ

118J1: あー 『蛇にピアス』? わか [なにになにだっけ?なんか

119C1: あ [あれ読んだことがあります うん

120J1: [それは あー なんか話題にな

121C1: うん 後[あの一同じ物語に基づいて 映画も出てき

122J1: ったよね [うん

(C1の発話が続く。後略)

「同時発話開始」のオーバーラップに見られる特徴は、1) オーバーラップ発話の前に、沈黙（「ごく短い沈黙」あるいは0.2秒以上の沈黙であり、オーバーラップをした話し手とオーバーラップされた話し手が共に作ったもの）が存在していること、2) 「でも」（例3、例4）、「あ」（例5）が何度も使われていることである。例3の1つ目の「でも」が、相手の発話と重なったため、相手の発話が終わったあと、理解を表すあいづち「あー」を打ち、引き続きもう一回「でも」を使い、話を展開した。例4には、1つ目と2つ目の「でも」両方とも相手の発話と重なり、3つ目の「でも」からそのオーバーラップが解消され、話が続けられた。例5の「あ」は、オーバーラップをした話し手が相手の先行発話「『蛇にピアス』?」と聞き、それについて何かを思い出したため、使われていると考えられる。

以上からオーバーラップをした話し手からの「あ」や「でも」の繰り返しによる要請により、オーバーラップされた話し手がターンをゆずることがわかった。

a-2 発話途中

例6～例9のいずれも、発話途中にオーバーラップが起きた例である。

例6 「長時間のアルバイトでC2が疲れた話題」

011C2 : {頷き} 昨日は5時間で

012J2 : 何時間働いてるの？ うん

013C2 : 休憩なし しんどいよ

014J2 : あ けっこうしんどいよね

015C2 : [腰が痛い] でこ

016J2 : あ レジと[違って(スーパー名)は] うん

017C2 : **こも痛い**{首を指す} {頭を下げる} こうなってる

018J2 : あ そんなとこ痛くなるの？

(C2の発話が続く。後略)

例7 「給料が上がった話題」

087C2 : (0.8) (スーパー名) は？

088J2 : (スーパー名) ね 50円

089C2 : そんな[なに変わらないけど

090J2 : アップだったの [今は違う] え？50

091C2 : えそうなん？

092J2 : 円アップけっこう大きいよ だって前は

(J2の発話が続く。後略)

例8 「レジの自動計算機能についての話題」

233C2: _____ [そうそうそう[そう

234J2: うん チェックしないとだめ[自動だから [うん

235C2: _____ うん [で あのー食

236J2: 自動でも一応チェックするけど _____ で[も

237C2: 品だから 時々なんて言う そのー あれ あの

238J2: _____ うん

239C2: 一打ってるやつ[がなくて なんかもあのーみんな

240J2: _____ [うん うん

(C2の発話が続く。後略)

例9 「C2が、アルバイト中、トイレに一回も行かないことにびっくりした話題」

283C2:

284J2: 飲み物飲む人もいる いいんだって でも言い

285C2: _____ [でも5時間トイレに

286J2: くいめっちゃ 忙しかったら[閉められないじゃん

287C2: 行かないのが _____ のが [おかしいでしょ？

288J2: _____ 行かないよ [行かないよ私

289C2: 5時間で

290J2: _____ うんでもみんなほ行ってない人もいるよ

(J2の発話が続く。後略)

「発話途中」のオーバーラップに見られる特徴は2つある。1) 例6と例7のように、オーバーラップ発話の冒頭にはあいづちはなく、また、「あ」や「でも」のような発話の開始を相手に知らせるものもなく、相手の発話と重なっている。これは、オーバーラップ発話の前に、オーバーラップをした話し手（例6の015C2、例7の090J2）がオーバーラップをする直前に、一度ターンを取っている（例6の「しんどいよ…」、例7の「（スーパー名）ね 50円アップだったの…」）ものである。オーバーラップ発話が自分自身の先行発話の継続あるいは補足となっているため、相手の注意を引く「あ」や「でも」のような言語形式が現れないのではないかと考えられる。2) それに対して、例8と例9では、オーバーラップをした話し手である235C2と285C2のどちらも、オーバーラップ発話の前に、ターンをとっていない。「で」、「でも」、「あの一」などを用いて、「a-1 同時発話開始」のように相手の注意を引き、相手がターンをゆずることで、オーバーラップが解消されている。

a-3 発話終了直前

例10と例11は、発話終了直前に、オーバーラップをした話し手が相手のターンの終わりを待たず、早めにターンを取った例である。

例10 「お釣りを間違えた話題」

207C2: 私昨日ね 1万円の札を5 5千円の札[と]思って

208J2: うん [それよく]

209C2: [そうですか[でも]

210J2: やる それほんとはよくやる[日本人でも[やる]

211C2: えそう 私 でほんとは6千円のお返しで 千円

212J2: うん

(C2の発話が続く。後略)

例 11 「ある小説で書かれた現代人の生活についての話題」

139C1: あの [感じなんですね

140J1: あ なるほど それなんか

141C1:

142J1: ちょっと なんかアイデンティティ

143C1: [うんうん{頷き}

144J1: ーじゃ[ないけど 人とちょっと

145C1: [うんうん{頷き} だからあの一

146J1: 違う[ことみたい

(C1の発話が続く。後略)

「発話終了直前」のオーバーラップに見られる特徴は以下の 2 つである。1) 例 10 : 210J2 の「日本人でもやる」、例 11 : 146J1 の「ことみたい」のように先行発話が「終止形」で終了しそうに感じられるところで、オーバーラップ発話が始まっている。2) このようなオーバーラップ発話の冒頭には、例 10 の 209C2 の「そうですか↓」や例 11 の 145C1 の「うんうん」などのようなあいづちがよく使われている。これらのあいづちは相手の先行発話を受け入れていることを示すものであると考えられる。

5. まとめ

- (1) 今回の資料のオーバーラップ発話は、全体から見れば、日本語母語話者の使用回数 (42) が中国語を母語とする日本語学習者 (33) より多い。母語話者は、「相手のあいづちと重なる自発話の継続」のオーバーラップが多く (17)、会話の進行を促進することも、妨害することもなく、「中立的」なオーバーラップを使う傾向がある。一方、学習者は、「ター

ン取りのため」のオーバーラップが多く(17)、会話の進行に影響を及ぼすオーバーラップを使用する傾向が見られた。

- (2) 本稿では、「ターン取りのため」のオーバーラップ発話を、オーバーラップの出現位置により「同時発話開始」、「発話途中」、「発話終了直前」に分けて分析を行い、それぞれの特徴を以下のようにまとめた。

a-1 同時発話開始

- 1) オーバーラップ発話の前に、オーバーラップをした話し手とオーバーラップされた話し手が共に作った沈黙が存在している。
- 2) オーバーラップをした話し手からの「あ」や「でも」の繰り返しによる要請により、オーバーラップされた話し手がターンを相手にゆずっている。

a-2 発話途中

- 1) オーバーラップ発話の前に、オーバーラップをした話し手がターンをとっている場合、そのオーバーラップ発話が自分自身の先行したターンの継続あるいは補足となっているため、相手の注意を引く「あ」や「でも」のような言語形式が使われないと考えられる。
- 2) オーバーラップ発話の前に、オーバーラップをした話し手がターンをとっていない場合、「で」、「でも」、「あの一」などを用いて、「a-1 同時発話開始」の2)のように相手の注意を引くことで、ターンを取得している。

a-3 発話終了直前

- 1) 先行発話が「終止形」で終わりそうに感じられるところで、オーバーラップ発話が起きている。これは、オーバーラップをした話し手が早めにターンを取る、いわゆる相手がターンをゆずることを催すために発せられたオーバーラップであると考えられる。
- 2) このようなオーバーラップ発話の冒頭には、「うんうん」、「ええ」、「そうですか↓」などの理解や同意を表すあいづちがよく使われている。これは、相手の先行発話を受け入れていることを示すものだと考えられる。

<参考文献>

- 生駒幸子 (1996) 「日常会話における発話の重なるの機能」 『世界の日本語教育』 第 6 号、国際交流基金、pp.185-199
- 金志宣 (2002) 「Turn-taking 研究の動向—“turn”と“turn-taking”をめぐる議論を中心に—」 『言語文化と日本語教育』 2002 年 5 月特集号、日本言語文化学会、pp.205-221
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化』、世界思想社
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』、くろしお出版
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつき」 『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』、三省堂
- 都恩珍 (2004) 「日常会話における同時発話—発話文類型に見る機能性—」 『桜花学園大学人文学部研究紀要』 第 6 号、桜花学園大学、pp.203-221
- 藤井桂子 (1996) 「日本語の発話の重なるの特徴—重なるの機能の分析から—」 『人間文化研究年報』 第 20 号、お茶の水女子大学人間文化研究科、pp.268-277
- 深澤のぞみ (1997) 「会話への積極関与としての割り込み発話—異文化間コミュニケーションの会話分析—」 『社会環境研究』 第 2 号、金沢大学大学院社会環境科学研究科、pp.131-139
- H.サックス, E.A. シェグロフ, G. ジェファソン (西坂仰訳) (2010) 『会話分析基本論集：順番交替と修復の組織』、世界思想社
- Sacks, Harvey, Schegloff E.A. and Jefferson G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50, 4, pp.696-735

日本語のテクルとタイ語の maa の派生用法

Derivative Usages of “*Tekuru*” in Japanese and “*Maa*” in Thai

久保田 育美^①

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 M2

要旨

テクルは、話し手の近くへの移動をあらわす直示移動動詞来ルが派生して多様な概念領域へと意味拡張する。また、日本語の来ル・テクルに相当するタイ語^②は maa であり、maa も日本語と同様、話し手の近くへの移動を基本的意味とする。本研究では日本語のテクルとタイ語の maa を取り上げ、両言語それぞれの派生において何が重要な要素となるのかを考察するために、テクルと maa それぞれの用例を概観した。用例を分析した結果、来ル・maa 本来の意味となる移動が背景化し、事態が差し向けられることで話し手が受ける影響、さらには、話し手が事態と自分との間に関与性を見出すことが重要な概念となることが分かった。

キーワード：テクル、maa、意味拡張、派生用法

Abstract

“*Tekuru*” is a deictic motion verb, conveying the sense of movement in a direction towards the speaker. This form can be used to expand the conceptual boundaries of various meanings. In Thai, the word “*Maa*” has the same meaning as the Japanese “*Tekuru*”. This study aims to identify the main factors that determine the use of these semantic extensions in both Japanese and Thai by looking through

^① e-mail : boo_ikumi@hotmail.co.jp

^② タイ語は孤立語であり、基本語順は主語＋動詞＋目的語の SVO 型、被修飾語＋修飾語の NA 型である。タイ文字は子音文字に母音記号と声調記号を組み合わせる表記する音節文字を用いて表記するが、本稿では音韻表記を用いてタイ語を表す。

a set of sentences in both languages. A thorough investigation shows that while the directional meaning forms a background, the influence a speaker takes from the way conditions and events are directed towards them, as well as the degree of involvement that the speaker feels between current events and themselves, are important factors in determining how these forms are used in both languages.

Keywords : “*Tekuru*”, “*Maad*”, semantic extensions, derivative usages

1. はじめに

- (1) 明日、太郎が大阪に来る。
- (2) どうしようもないところまで来てしまった。
- (3) 頭に来る。
- (4) 太郎が部屋に入ってくる。
- (5) さっき太郎がじろじろ見てきたの。
- (6) 村上春樹、上手い喩えを使ってくるな。
- (7) 最近、寒くなってきた。

来ルは、話し手の近くへの移動をあらわす直示移動動詞である。(1)は話し手の現在位置(あるいは話し手が認識している自分の領域)である大阪に太郎が近づくことを表している。また、来ルは人や物の場所的移動を基本的意味とし、用法が拡張して事態の移行推移などに広く用いられる。(2)はある事態が自分に到来したことをあらわしており、(3)は話し手に心理的変化が生じたことを表す。

テクルは本動詞来ルに対して補助動詞としての機能を持つ。テクルは(4)のように人あるいは物といった具体的事物の移動をあらわす意味を基本としながら多様な概念領域へと意味拡張しており、事態そのものにテクルを用いる

(5) (6)、時間的意味に派生した(7)のような表現がある。

このように、日本語の来ル・テクルには、話し手の近くへの移動を基本的意味とした多様な派生用法が存在する。従来の研究でも、さまざまな用法がどのような特徴を持っており、どういった概念が派生する上で重要であるかが分析

されている。しかし、他言語に関する研究はそれほど多くはない。本研究で扱うタイ語もその一つである。話し手が事態をどう見ているか、感じているか、いわば話し手の心を裏打ちした表現とも言える来ル・テクルが、表現として使用される際にどういった拡張を見せているかを明らかにすることは、諸言語においても重要だと思われる。本研究はその第一歩として、日本語ではテクルに焦点を当て、テクルの意味的な派生用法について再検討を行うとともに、日本語の来ル・テクルに相当するタイ語の *maa* にどういった意味拡張が生じており、またその特徴は何であるかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 来ル・テクルの派生用法に関する研究

本節では、来ル・テクルの派生用法に関連する先行研究をとりあげる。

森田（2002）によれば、本動詞来ルが用いられる際の人や物の場所的移動の原則は、話し手の現在の位置（ここ）に視点を置いた対象把握である。また、具体的な位置移動ではなく、ある状況を認識する際にそれを移動現象として捉えるとき、その事象を迎え受ける場合にも来ルを用いる。森田は、意味が転化して来ルが使用されている用法を挙げ、使用の発想を探っている^③。

- ①とうとう冬が来た (到達・到来)
- ②数分後に軽い痙攣が来る (出現・生起)
- ③原因は私たちの不和から来ている (由来・起因)
- ④頭に来る (精神の出現)
- ⑤酒と来ると我慢のならない人 (話題の提起) [森田 2002 : 237]

また、来ルが派生したテクルは、来ルと同じように具体的な移動行為から抽象的な状態変化まで多彩な概念領域に用いられる。森田（2002）の分類では、

^③ 森田（1994）は、現在の位置からとらえた来ル表現を「現実的把握」、転移して観念的な位置から見た来ル表現を「観念的把握」と呼んでおり、行くを含め、行き来表現には「現実的把握」と「観念的把握」の二重性が認められると述べている。

移動をあらわす用法に関して、①順次性（行為を終えてから移動することをあらわす）、②平行性（移動と平行し得る行為をあらわす）、③状態性（移動の状態をあらわす）、④複合動作（移動行為そのものの有り様とその移動の方向をあらわす）が挙げられている。

①本屋に寄って、本を買ってきた。 (順次性)

②妻が赤ん坊を抱いてきた。 (平行性)

③バスに揺られてきた。 (状態性)

④父が帰ってきた。 (複合動作)

[森田 2002 : 239-241]

これらの用法はいずれも人の場所的移動を問題としているが、それに対して、今仁 (1990) はテクルが移動を示す場合、それは対象移動をあらわし、移動の対象としては目に見えないものの波及や当事者に及ぶ何らかの影響（被害、苦痛、喜び、驚きなど）も含まれる、と述べている。

(8) 先方が、さっき文句を言ってきました。

(9) *彼女が、ようやく、座ってきた。

(10) あいつが最初に俺に腹を立ててきたんだ。俺が悪いんじゃない。

[今仁 1990 : 58-60]

これらの用例はいずれも、動作主のある行為が話し手に近づく方向性を表すものであるが、(8)～(9)は、話し手に影響が及んでいるか否かで文法性に差が出ている。(8)では、話し手自体が明示的に言語化されていないが、「先方が文句を言った」ことにより、話し手が被害を受けていることが読み取れる。一方、(9)の「座る」は動作主の個人的な動作であり、そのこと自体は他者にほとんど影響を及ぼさないため、テクルの場合、文の文法性が落ちる。「腹を立てる」も、本来動作主の個人的動作であるが、(10)のような文になると、話し手に精神的な影響が及んだのは明らかであるため、文法性が高まる。

2.2 maaに関する研究

タイ語の maa の基本的用法に関しては、タイ語の pai (行く) と maa を扱った Rangkupan (1992) を参考にする。maa は、日本語の来ルに相当し、辞書の語義は日本語と同様、話し手の近くへの移動⁴⁾である。まず、maa が後に場所をあらわす名詞や目的を表す動詞句をとる場合、主語の移動を表す。

(11) khǎo maa rɔŋrian

彼彼女 来る 学校

彼/彼女は学校に来た。

[Rangkupan1992 : 1]

(12) khǎo maa sɔ̃u khɔ̃ŋ

彼彼女 来る 買い物をする

彼/彼女は買い物をしに来た。

[Rangkupan1992 : 5]

一方、maa が他の動詞に後続し、いわゆる補助動詞として用いられる場合は、人や物の移動、動作の方向、状態変化といった多様な意味を表す。

(13) dəŋ cək bân maa mahǎawítthayaalai thúkwan (人の移動)

歩く から 家 来る 大学 毎日

毎日家から大学まで歩いて来る。

(14) khǎo sɔ̃n rɔ̃n maa thiiithamkaanpraisanii (物の移動)

彼彼女 送る お金 来る 郵便局

彼/彼女は郵便局にお金を送ってきた。

(15) mǎakii tharɔ̃o thooorasàp maa hǎa chǎn (メッセージの移動)

さっき 太郎 電話する 来る 探す 私

さっき太郎が私に電話してきた。

(16) cum thɔ̃n kɛ̃ dái maa tânfɛ̃ rɛ̃k (経験・継続)

ジュム 耐える あなた 可能 来る から 最初

ジュムは最初からあなたに耐えてきた。

(17) pùat thɔ̃ŋ khǎm maa (状態変化)

痛む おなか 上がる 来る

⁴⁾ 『タイ語辞書第5版』(1976 : 726) より。日本語訳は筆者による。

おなかが痛くなってきた。

これ以外に、坂本（1988）、峰岸・タッサニー（2003）が心理的移動を表す *maa* について考察しているが、用例の紹介にとどまり、詳細な分析は行われていない。個々の用例を観察して *maa* が用いられる要因の検討を要すると考えられる。

3. 意味的側面からみた派生用法の分析

本研究では、第2章で見た先行研究を踏まえ、人や物といった具体的事物の場所的移動を表すテクル及び *maa* を移動の意味が備わった基本的用法とし、それ以外の用法を意味的な派生用法とみなす。本章では、日本語とタイ語両言語の用例を概観し、各用例においてテクル、*maa* が用いられる要因は何なのか、意味拡張が生じる上で重要となる要素は何なのかを考察する。ただし、本稿における分析では、経験・継続や状態変化といった時間的用法を考察対象外とする。

まず、日本語のテクルの分析では、話し手への事態の方向性を表す用法を概観し、意味的な派生が生じる上で何が重要な要素となるのかを述べる。一方、タイ語の *maa* については、人や物の場所的移動の解釈ができない用例を順に見ていく。一見全く異なる意味を持つように見えるが、なぜ共通して *maa* が用いられるかを個別の用例を見ながら検討する。ただし、本稿ではテクル及び *maa* と共起する動詞それぞれの性質については言及せず、意味的側面からの考察を行う。

3.1 日本語のテクル

3.1.1 話し手側への事態の方向性を表すテクル

第1章で見たように、テクルで表されている事物は用例が進むほどより抽象度を増している。(4) は動作主である太郎の移動をあらわすが、(5) (6) に関しては、あえて移動する対象は何かと言われれば、動作主でも物でもない、事態そのものと言える。本稿では (5) (6) で使われているような、話し手

側への事態の方向性を表すテクルを分析する⁶⁾。

まず、話し手側への事態の方向性をあらわすテクル表現として (18) ~ (20) を見たい。

(18) 先方が、さっき文句を言ってきました。 (= (8))

(19) あいつが最初に俺に腹を立ててきたんだ。俺が悪いんじゃない。
(= (10))

(20) 友達とその仲間が怒りを歌で表現してくんだよ。 [蛇にピアス]

各用例の動作主となる「先方」「あいつ」「友達」が行う行為はいずれも被動作主である話し手に差し向けられたものであり、明確な話し手側への方向性がみとめられる。テクルの移動対象としては目に見えないものの波及や当事者に及ぶ何らかの影響が含まれると今仁 (1990) が述べているように、(18) ~ (20) ではいずれも話し手が迷惑、不快など、何かしらの影響を受けていると解釈できる。こうした影響は、動作主が行った行為の結果、話し手に生じる影響だが、「文句を言う」「腹を立てる」「怒りを歌で表現する」という動作主の行為自体が話し手に何かしらの影響を及ぼす行為だと言える。

次の (21) ~ (23) も (18) ~ (20) と同様、行為が話し手側に差し向けられている用例だが、ここでは話し手が受ける影響に注目したい。

(21) さっき太郎がじろじろ見てきたの。

(22) 担任教師は普段から友人のようにべたべたと接してくる。

[夜行観覧車]

(23) 夫が「今晚、帰りが遅くなる」と言ってきた。

(21) では、太郎の行為に対して「じろじろ」と感じているのはあくまでも話し手であり、太郎が相手に「じろじろ見ている」と思わせるような視線を向けているとは限らない。(22) も同様に、教師がどういう意図で行為の対象となる生徒に接しているかは不明であり、「べたべたと接する」と感じているのは話し手自身である。つまり、動作主の行為が行為の対象に差し向けられ

⁶⁾ 出典の記載がない日本語の用例は、実際の会話をもとにした筆者による作例である。

た結果、そこにどのような影響が生まれるかは動作主にはコントロールできないのである。(23)においても、夫は残業があるなどの理由で帰りが遅くなることを話し手である妻に伝えたにすぎない。しかし妻は夫の言葉を受けてテクルを用いており、「また遅いのか」「せっかく晩ご飯作ったのに」などの気持ちを抱いている情景が思い浮かぶ。

ここまで、移動という来ル本来の意味から派生し、事態に直接関わる被動作主への方向性が表されているテクル表現を見てきた。いずれの用例も文中で表されている行為が被動作主である話し手（あるいは話し手側の人物）に向けられており、話し手がそれに対して何かしらの影響を感じていると言える。

それに対し、以下の用例はどうだろうか。

(24) 大家が家賃を値上げしてきた。 [坂原 1995 : 125]

(25) フォーメーションを変えてきた。 [清水 2010 : 72]

(26) 村上春樹、上手い喩えを使ってくるなあ。

(24) を例にとつてこれまでの用例との違いを分析しよう。(24)において、家賃を値上げするという行為を行ったのは大家である。しかし、大家は意図して住民に値上げという行為を向けたわけではないだろう。住民に嫌がらせをしようという特別な文脈がない限り、経営困難などの外部から生じる要因で値上げに至るのが普通である。(24)でテクルを使用する要因には、方向性よりむしろ話し手である住民（あるいはその住民の関係者）が値上げの結果、影響を被っている点が重要だと考えられる。このように、(24)は動作主の行為が直接的に話し手に向かっていない点で(18)～(23)と大きく異なっている。もちろん、大家と住民という関係性を考えれば、大家による値上げの方向性が話し手である住民に向いているということは否めない。しかし、行為の方向性が直接その事態の中にいる当該相手に向かっているこれまでの用例と比べると、(24)は話し手への方向性が稀薄化していると言えるだろう。

(25) (26)も同様に、スポーツ選手とリポーター（あるいは観客）、小説家と読者といった関係性を考えれば方向性が存在すると捉えられるが、動作主が積極的に差し向けた方向性とは言えない。話し手が被害、驚き、感動など、

何かしらの影響を受けていることがテクルの使用に繋がっており、方向性はだいたい背景化していると考えられる。

さらに、方向性がほとんど稀薄化し、話し手が受ける影響が前景化したテクルが以下の用例である。

(27) 最近、天気予報はずしてくるよな。

(28) うちの工場の近くに家が建ってくるんだ。 [ゴールデンランバー]

(29) スキーは足をがっつり固めてくる。

これらの用例はいずれも主語が非情物となっている。(27)の主語である天気予報には予報をはずす意志など全くなく、天気予報がはずれること自体、そもそも話し手とは関係のない事態である。しかし、最近よく天気予報がはずれることに対して話し手が何かしらの思いを抱き、天気予報がはずれた事態があたかも自分に関係していると認識し、テクルを用いているものと思われる。

(28) (29)も主語は行為を行う意志を持たない非情物だが、やはり(27)と同じく、テクルで表された事態を受けて話し手が影響を受けていると解釈できる。

3.1.2 テクルの派生

3.1.1節で、話し手への事態の方向性を表すテクルを概観してきたが、話し手側への方向性という概念を基本に持ちつつも、事態を受けて話し手に何かしらの影響が及ぶことがテクルの派生において重要な要素となることが分かった。「先方が文句を言ってきました」は動作主から話し手側への事態の方向性が明確に存在しており、話し手が受ける影響も含意される。一方、「最近、天気予報はずしてくるよな」は、本来話し手とは関係ない「天気予報がはずれた」という事態を受けて話し手に何かしらの影響が及び、話し手が自分と事態とを関与づけている。事態の方向性を表すテクルの派生では、動作主から被動作主である話し手側への方向性が明確に存在する用法から、方向性が徐々に背景化し、話し手が自分と事態とを関与付けることがテクルの使用に繋がっている用法もあることが分かった。

3.2 タイ語の maa

3.2.1 話し手側への事態の方向性を表す maa

日本語と同様、具体的事物の移動を表さない maa の用例^⑥を見ていくこととする。

まず、「言う」「電話をかける」など、目には見えない発話内容が話し手の方に向かっていることをあらわす場合、maa は後続動詞として用いられる。タイ語の文成立にあたっては語順が決定的な役割を果たすことが多いため^⑦、「言う→（言った内容が）来る」という語順はタイ語の特徴から見れば自然だと考えられる。

(28) bòk maa kòon wâa cà fâak ñaan hái

言う 来る 先に ～と 意志 預ける 仕事 ために

まず仕事を紹介するって言いなさい。

[dok som see tong]

(29) mûakîi tharòu thoo^{ra}sàp maa hǎa chán

さっき 太郎 電話をかける 来る 探す 私

さっき太郎が私に電話してきた。

さて、タイ語の maa の意味拡張において特筆したい点は次からである。久保田（2015）はタイ語においても日本語に見られる話し手側への事態の方向性を表す maa が存在するのではないかと考察しており、直接対話場面（話し手、聞き手がお互いの面前にいて言葉が交わされる場面）における会話を例に挙げている。

(30) yàa maa rîak phòm yàanⁿⁱⁱ ná

禁止 来る 呼ぶ 僕 このように 終助詞

僕のことをそんなふうに呼ぶな。

[dok som see tong]

^⑥ 出典の記載がない用例は、タイ語母語話者による作例、または、タイ語母語話者の会話および参考文献をもとにした筆者による作例である。

^⑦ 坂本（1988）によれば、タイ語の述語動詞は複数の動詞連続であることが多く、maa は他の動詞に先行したり、後続したりして用いられることが多い。また、峰岸・タッサニー（2003）は、複数の動詞およびその補語が形成するタイ語の統語構造を「動詞連続構造」あるいは「動補連続構造」と呼んでいる。

(31) khun (yàak) maa (lɔŋ) chua chǎn thammai

あなた 欲しい 来る 感う 信じる 私 なぜ

君はなぜ私の言うことなど信じたのか (信じなければよかったのに)。

[峰岸・タッサニー2003 : 245]

まず、この2例において考えなければならないのは、直接対話場面であるため発話時において聞き手(動作主)の移動が含意されるはずがないということである。(30)の「呼ぶ」は、先に見た「言う」「電話をかける」と同様、発話内容の移動を表す動詞であるため、本来であれば *maa* が「呼ぶ」に後続するはずだが、ここでは *maa* が先行している。(31)については峰岸・タッサニーが「わざわざ～するなんて」という心理的な距離を感じるということが関係した *maa* と説明しているが、距離を感じるのになぜ話し手への接近を表す *maa* なのか、*maa* を使用する理由に対する説明が不十分である。

しかし以下の用例を検証すると、(30) (31) の *maa* も話し手側への事態の方向性を表すという解釈が優勢だと考えられる。

(32) a. (「i**ī** baa (バカ野郎)」という言い方をするタイ語学習者に注意の意を込めて)

phūut yàaŋnī. mǎi phrǔ? ná

話す このように 否定 きれい 終助詞

そんなふう話すの、きれいじゃないよ。

b. (「i**ī** baa (バカ野郎)」というひどい言い方をするタイ人の友人に対して)

maa phūut yàaŋnī. mǎi chǎp lǎi⁴

来る 話す このように 否定 好き 強調

そんなふう話すの、好きじゃない。

(32a) (32b) とともに、直接対話場面である。どちらも、「話す」行為を行った相手から話し手への方向性が存在している点は共通しているが、(32a)で *maa* が用いられず、(32b)で *maa* が用いられる。また、2つの場面の違

⁴タイ語母語話者に尋ねたところ、(32b)は必ずしも *maa* が不要ないという人もいた。しかし誰もが共通して、*maa* を用いることでより感情が強く表せると答えていた。

いは話し手が相手の発言により影響を受けているか否かにある。(32a)のよう単なる注意喚起は話し手の心にまで影響を与えることではないが、(32b)では話し手が相手の発言を受けて不快に感じ、心的影響を受けている。

(33) yàa maa yûŋ kàp chǎn

禁止 来る 煩わす〜と 私

私を煩わしに来るな(私のことは放っておいてほしい)。

[峰岸・タッサニー2003: 245]

(34) (母におねだりしようとする子どもが)

mêε khǎa

お母さん 終助詞

お母さん。

yàa maa

禁止 来る

やめて。

峰岸・タッサニー(2003)が、(33)は「わざわざ煩わせるな」という話し手の心情を示していると述べているように、(33) (34)は話し手に及ぶ心的影響を表していると言えよう。(34)の「yàa maa」は、「yàa maa」の後ろの部分省かれたイディオムだと捉えられ、maaに後続する動詞が省略できるということは、すなわち、具体的な行為が問題となっているのではなく、「やめて」という話し手の気持ちが表されているのだろう。

以上、(32)～(34)にみた maa の用例では、ある行為ないしは事態が話し手の方に差し向けられており、さらにそれを受けて話し手が何かしらの影響を受けている。動作主の移動を含意せずとも maa が動詞句に先行することで、日本語と同様に、maa も話し手側への事態の方向性を表しうるのではないだろうか。(30) (31)もまた、話し手が相手の行為により不快、迷惑などの心的影響を受けており、maa の使用によって話し手側への事態の方向性が表されていると言えるだろう。

3.2.2 事態の生起を時間軸に捉えた *maa*

(35) *tæŋŋaan maa 10 pii. phân maa mij lúuk*

結婚する 来る 10年 ばかり 来る ある 子ども
結婚して 10年。やっと子どもができた。

(36) *kæ maa śiəcaɪ thammai tɔnnii*

おまえ 来る 残念に思う なぜ 今
あんた、今さらなぜ残念に思っているの。

(35) (36) のような用例は、ある事態の生起を時間軸におき、あたかも事態が移動しているように捉えていると解釈できる。(35)において、子どもができるという事態は、現在より早い時期に起こるべきことであった。しかし時遅し、現在はそうあるべきで時ではない。この用例では、そうあるべきだと考えられる理念上の時間と現実の時間にずれが生じているのである。(36)も同じく、話し手は「今はもう残念に思う時ではない」と感じているのだろう。本来、残念に思うべきときは過去であるはずが、現在、今そうあるべきではない現在に残念に思っていることを表しているのだろう。話し手が、事態の生起が起こって然るべき時間からそうでない現在に來たと認識していることから、*maa* を用いているものと考ええる。

同じく、時間軸に事態の生起を捉えている用例として、以下を見たい。

(37) (指導教官が学生に対して)

ʔiik 2 duan. cà maa nân nân non non yùu bæpnii mâi dâi ná

残り 2ヶ月 意志 来る 座る 座る 寝る 寝る 継続 このように否定 可能 終助詞
残り 2ヶ月、そんなふうにダラダラしてはだめですよ。

(38) *yaŋ cà maa thamŋaanphisèet yùu ʔiik*

まだ 意志 来る アルバイトをする 継続 まだ
まだアルバイトをしているなんて。

(37) (38) もまた、今はその行為をするに相応しくない時間であると話し手が考えていることが共通している。「ダラダラする」ことは論文提出 2 か月前となった今に相応しい在り方ではない。これらの用例では継続を表す

(*yaŋ*~) *yüu* が用いられていることから「未だ~している」という意味合いが含まれる。今そうあるべきではない事態が現在もなお続いている、つまり (35) (36) 同様、然るべき時ではない現在に事態が来たと捉えている用法だと考えられる。

3.2.3 *maa* の派生

3.2.2 で挙げた用例は一見、3.2.1 で見た話し手側への事態の方向性を表す *maa* とだいぶ種を異にしていると考えられる。しかし、いずれの用例においても言及しなければならないのは、話し手が *maa* で表された事態と何かしらの関係があり、それによって何かしらの影響を受けていることである。

3.2.1 で見た用例はいずれも、事態が話し手側に差し向けられたものであった。一方、3.2.2 では話し手に対して事態が差し向けられているわけではない。「子どもを持つ」「残念に思う」「ダラダラする」「アルバイトをする」ことは全て話し手とは関係のない事態である。しかしながら、話し手はある事態を見聞きして何かしらの感情を持ち、あたかも話し手と事態との間に関係があるように捉えている。3.2.2 の用例もただ単に事態の生起と時間の関係をあらわした用例なのではなく、そうした話し手による事態と自分との関与付けが含まれるのである。

(39) (パーティーで黒い服を着ている友人に対して)

mii sáaphâa thánj láai sŭi. thammai maa sài sŭi dam

ある 洋服 ~も いろいろな 色 なぜ 来る 着る 色 黒

いろいろな色の服を持っているのに、どうして黒い服を着るの。

(39) は話し手への方向性が全く読み取れない。そもそも「黒い服を着る」ことは他人に対する行為とはなり得ず、本来話し手に何の影響も及ぼさないとはいえずである。しかしこの場面では、話し手が「葬式でもないのになんで黒い服を着るの」「今日はパーティーなのによりによって黒い服を着るなんて」という気持ちを相手に対して抱いていることとなる。(39)こそ、話し手が自分と

は本来関係のない事態に何かしらの思いを抱き、自分と事態との間に関与性を見出していることが顕著にあらわれた例だと言えよう。

4. おわりに

まず本研究で明らかになったのは、日本語のテクルとタイ語の *maa* 両言語の空間的用法において、意味的な派生用法が見られるということである。日本語においては、話し手側への事態の方向性を表す用例を概観し、テクルの使用において重要となる要素を考察した。一方、タイ語の場合は、人や物の場所的移動の解釈ができない *maa* の用例を見ることで、*maa* が用いられる要因を探った。両言語の用例の大半は話し手の近くへの移動を基本としながらも、話し手側への事態の方向性が前景化し、物理的あるいは心理的に話し手が影響を受けていることが表されている。しかし、話し手側への方向性がほとんど捨象され、話し手が事態と自分との間に関与性を見出すことのみが際立ってテクル及び *maa* が使用される場合があることも明らかになった。

ただし、本稿は、日本語とタイ語の用例を個別に観察して各々の特徴を述べたにすぎず、日本語に見られたテクル表現のうち何がタイ語に対応するのか、タイ語に見られた *maa* 表現のうち何が日本語に対応するのかを調べていない。日本語とタイ語それぞれの特徴を明確に検証するために、今後は各用例を両言語で対照し、考察を深めていきたい。

<参考文献>

- 池上嘉彦 (2004) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標
(2)」『認知言語学論考 No.4 2004』ひつじ書房、pp.1-60
- 今仁生美 (1990) 「VテクルとVテイクについて」『日本語学』第9巻、第5号、pp. 54-66
- 菊池敦子 (2002) 「COME とクルの意味拡張における到着点の違い」佐藤滋ほか (編) 『対照言語学の新展開』ひつじ書房、pp.27-45
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店

- 久保田育美 (2015) 「タイ語の「maa」の意味拡張—日本語の「来る／てくる」を手がかりに—」『日本語・日本文化研究』第 25 号、大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻、pp.112-121
- 古賀裕章 (2008) 「「てくる」のヴォイスに関連する機能」森雄一ほか (編) 『ことばのダイナミズム』くろしお出版
- 坂本比奈子 (1988) 「日本語の動詞「行く／来る」とタイ語の動詞 pay/maa の対照研究」『麗澤大学紀要』47 号、pp.41-74
- 清水啓子 (2010) 「日本語「動詞+テクル」構文の逆行態用法について」『熊本県立大学文学部紀要』第 16 巻、熊本県立大学文学部、pp.47-75
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心とする日本語とタイ語の対照研究』ひつじ書房
- 峰岸真琴, タッサニー・メーターピスィット (2003) 「タイ語の「行く・来る」」『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』東南アジア諸言語研究会 編、pp.211-248
- 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- มานิต มานิตเจริญ (1976) "พจนานุกรมไทย พิศุทธิ์ครั้งที่ ๕", ห้างหุ้นส่วนจำกัดบำรุงสาส์น, กรุงเทพฯ
- [Manitcaroeng, Manit (1976) 『タイ語辞書第 5 版』Bamrung-sarn-Ltd., Bangkok.]
- สุดารังกุพันธุ์ (1992) "กริยาของ ไป และ มา ในภาษาไทย", จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย. บัณฑิตวิทยาลัย
- [Rangkupan, Suda (1992) "Subsidiary Verbs/Pay/'Go' and/Maa/'Come' in Thai", Chulalongkorn University. Bangkok. (Thailand). Graduate School]

<用例出典>

- 伊坂幸太郎 (2007) 『ゴールデンスランバー』新潮社
- 金原ひとみ (2006) 『蛇にピアス』集英社文庫

湊かなえ (2013) 『夜行観覧車』 双葉文庫

ถ่ายเอก สุจิตกุล (2011) “ดอกส้มสีทอง”, broadcast Thai Television

[Sutcaritkun, Thaaithao (2011) “*dok som see tong*”, Broadcast Thai Television]

【書評論文】

館岡洋子編『日本語教育のための質的研究 入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』

Tateoka Yōko (Ed.) “Nihongo Kyōiku no Tame no Shitsuteki Kenkyū Nyūmon : Gakushū / Kyōshi / Kyōshitsu o Ikani Egaku ka”

古屋 憲章^①

早稲田大学大学院日本語教育研究科 D4

館岡洋子編 (2015) 『日本語教育のための質的研究 入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』 ココ出版、408 頁、ISBN 978-4-904595-68-8、定価 2,400 円＋税)

本稿において書評の対象となる館岡編 (2015) は、日本語教育界初の日本語教育をフィールドとする質的研究に関する入門書である。

日本語教育研究においては、現在、次の三つのタイプの研究が混在している。

	タイプ 1	タイプ 2	タイプ 3
研究対象	日本語 (音声、語彙、文法、談話・文章等)	普遍的なヒト	多様な個人・場
背景となる学問分野	言語学 (日本語学)	第二言語習得研究、実験心理学	社会学、人類学、質的心理学等、多様な分野
研究方法	量的研究	量的研究	質的研究

タイプ 1 は、1980 年代以前から行われている日本語を対象とする「言語学で得られた知見 (理論) を日本語教育に応用する」 (館岡, 2015, p.14) ための研究である。タイプ 2 は、1980 年代後半から行われている普遍的なヒト

^① e-mail : frynrak@gmail.com

(主に日本語学習者)を対象とする「第二言語習得研究や心理学で得られた理論を実践に応用する」(館岡, 2015, p.14) ための研究である。タイプ3は、2000年代以降行われている多様な個人(日本語教師、移動する子ども、外国人介護福祉候補者等)や場(学校の教室、地域のボランティア教室等)を対象とする実践研究である。タイプ1、タイプ2は、量的研究になる場合が多い。なぜなら、対象が言語であれ、普遍的なヒトであれ、いずれも普遍的な理論を構築することが研究の目的だからである。一方、タイプ3は、質的研究になることが多い。なぜなら、特定の日本語教育のフィールドから生まれたローカルな理論を記述することが研究の目的だからである。

館岡編(2015)では、(タイプ3に示したように)近年盛んになって来ている日本語教育における質的研究に関し、その理念、背景、および事例が紹介されている。本書は3部構成になっている。第1部「日本語教育における質的研究—今、なぜ質的研究なのか—」では、主に質的論文に対して抱かれる「客観的ではないのではないか」といった疑問に関するディスカッションが行われている。第2部「個をとらえる質的研究」、第3部「場をとらえる質的研究」では、それぞれ執筆者がどのように質的研究を展開していったかが描かれている。

館岡編(2015)は、日本語教育における質的研究に関し、次のように述べている。

質的研究を行うということは、フィールドのデータをある決まった手順にしたがって処理していくといった「やり方」だけを指しているのではないということです。何をめざして何のために研究をするのか、自らがフィールドをどう捉えるのか、見たいものは何かという問いに対して、自分自身が工夫して「方法」を生み出していくものではないかと思います。(館岡, 2015, p.iv)

確かに館岡編(2015)では、M-GTA、PAC分析、SCAT、ライフストーリー、

エスノグラフィー、会話分析といった様々な質的研究手法が紹介されている。しかしながら、本書は質的研究の「やり方」を学ぶ書ではない。各執筆者（＝日本語教師）がどのように自身のフィールドを記述し、公開したかというストーリーをもとに、読者自身が自らのフィールドをどのように記述し、公開するかを考えるための書である。そのため、本書では、各執筆者の質的研究をめぐる試行錯誤と葛藤のプロセスを一人称により時系列で語られている。これにより読者は、各執筆者にとっての質的研究を各執筆者の視点で追体験することができる。

あなたが自身の日本語教育のフィールド（学習・教師・教室）を記述し、公開してみたいと切に願うのであれば、質的研究は必ずその支えになるはずである。そして、あなたが実際に質的研究により自身のフィールドを記述・公開しようとする際、本書で詳細に描かれている「執筆者たちがそれぞれのフィールドで取り組んだ実践研究のプロセス」（館岡編，2015，p.iv）が、よきガイドとなってくれるはずである。

原稿執筆について

- 書式

- A5用紙
- 横書き
- 35字28行
- 余白 上：15mm／下：20mm／左右：17mm／フッター：7.6mm
- 文字フォント：MS明朝（タイトルの場合はMSゴシック）
英文と数字のフォント：Century
- 文字サイズ 10pt
- ページ番号：不要
- 脚注：各ページの最後、文字サイズ9pt
脚注の番号は上付き文字の(1)、(2)等

- 第1ページの書き方

- 1行目中央に題目 (MSゴシック太字 11pt)
- 1行空けて中央に執筆者氏名 (10pt)
- 氏名の横に肩書き 例) 大阪大学大学院 コース名 MO
- 脚注に執筆者の連絡先（メールアドレス）を示してください
- 2行空けて要旨（要旨の最後にキーワードを入れてください）
- 1行空けて Abstract（英文の要旨）
- 1行空けて本文

- 枚数：15-20枚程度

- 送付先：

1. OPEN JOURNAL SYSTEM

<http://www.arts.chula.ac.th/~east/japanese/japanstudiesjournal>

2. メールアドレス

japsect@yahoo.com

- 締切：

4月号：毎年の2月28日

10月号：毎年の8月31日

編集後記

本号で査読採択された論文は、2015年8月18日にチューラーロンコーン大学で開催された「大阪大学・チューラーロンコーン大学大学院研究交流会」にて発表された内容が基になっています。

本号では、2015年度の交流会で特別講義として行っていただいた加藤均教授の「仏像から日本の宗教文化を考える」と儀利古幹雄先生の「日本語のアクセントとその規則性」を巻頭論文として掲載させていただきました。

巻頭論文の他に、ユッパワン・ソーピットヴッティウオン氏の「初対面の会話における話題転換のパターン—日タイ対照研究—」、ズオン・ティ・ホア氏の「連用形名詞の使用をめぐる一位相語としての連用形名詞を中心に—」、徐麗潔氏の「接触場面における日本語のオーバーラップ発話—「ターン取りのため」のオーバーラップを中心に—」、久保田育実氏の「日本語のテクルとタイ語の maa の派生用法」が掲載されています。いずれの論文も従来の枠組みを超えた新しい観点からの研究であることが読者の皆様に発見していただけるのではないのでしょうか。また、彭雨新氏の日本文学研究論文である「中島敦『李陵』における「自己」と「他者」の問題」が挿入されていることで、より多くの層の読者の興味も惹かれることと思われま

本号で当論集を発行して以来、初めての書評論文を掲載するにあたって、日本語教育学研究者である早稲田大学の古屋憲章氏に著者となっていただき、2015年にチューラーロンコーン大学で客員教授も務められた早稲田大学教授の舘岡洋子先生が編集された質的研究をテーマとした『日本語教育のための質的研究 入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』について、論じていただきました。

なお、本号より論文のインターネット投稿が可能になりましたので、今後はタイのみならず、東南アジア各国からの研究論文のご投稿を期待したいと思います。本号の刊行に際して、査読委員の方々に多大なご尽力をいただきました。本号編集長として、深く感謝申し上げます。

(アサダーユット・チューシー)

『日本研究論集』 第13号
Japanese Studies Journal No.13

2016年4月発行

April, 2016

編集代表

Editor in Chief

チョムナード・シティサン (チューラーロンコン大学助教授)

Chomnard SETISARN (Assistant Professor, Chulalongkom University)

編集長

Issue Editor

アサダーユット・チューシー (チューラーロンコン大学助教授)

Asadayuth CHUSRI (Assistant Professor, Chulalongkom University)

副編集長

Associate Editor

アッタヤ・スワンラダー (チューラーロンコン大学准教授)

Attaya SUWANRADA (Associate Professor, Chulalongkom University)

査読委員

International Editorial Board

アサダーユット・チューシー (チューラーロンコン大学助教授)

Asadayuth CHUSRI (Assistant Professor, Chulalongkom University)

五之治昌比呂 (大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)

GONOJI Masahiro (Associate Professor, Osaka University)

堀川智也 (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻教授)

HORIKAWA Tomoya (Professor, Osaka University)

チョムナード・シティサン (チューラーロンコン大学助教授)

Chomnard SETISARN (Assistant Professor, Chulalongkom University)

荘司育子 (大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)

SHOJI Ikuko (Associate Professor, Osaka University)

鈴木睦 (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻教授)

SUZUKI Mutsumi (Professor, Osaka University)

筒井佐代 (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻教授)

TSUTSUI Sayo (Professor, Osaka University)

Printed in Thailand

© Japanese Section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
(japsect@yahoo.com)

Studies in Language and Society, Graduate School of Language and Culture, Osaka University

ISSN 1906-8891

印刷・製本

チュラーロンコーン大学印刷所

Chulalongkorn University Printing House

Bangkok 10330, Thailand

Tel. +66 (2) 218-3557, +66 (2) 218-3563

e-mail : cuprint@chula.ac.th

